

# 縁塚古墳群 II・III

— 香川県大野原町丸井所在の群集墳の調査 —



1992.3

大野原町教育委員会

## 発刊にあたって

平成3年3月31日縁塚古墳群第一調査区の発掘調査報告書を刊行いたしましたが、つづいて今回第二調査区、第三調査区の報告書を刊行いたしました。第二、第三調査区は、第一調査区に比べ、調査面積も広範で、発掘調査した古墳は9基を数えました。出土物もおびたしい数にのぼりましたが、復元できるものは総て復元し、町民俗資料館に保存展示して、広く町民の文化財についての意識を高めるとともに、長く後世に伝え、町発展の活力にしたいと考えております。

最後に、本発掘調査にあたり、ご指導いただいた県教育委員会並びに、ご協力いただいた地権者の方々に厚く御礼申し上げてあいさついたします。

平成4年3月1日

大野原町長 薦 田 良 知

## はじめに

郷土に残されている文化財は、ふるさとの先人達が残した貴重な文化遺産であります。これら文化財を大切に保護し、文化財に学んで、新しい文化を創造することは、現代に生きる私たちの責務であると思います。

このたび四国自動車横断道工事が、大野原町区で施行されるに当たり、高速道路の盛土を縁塚一帯から採土する計画がすすめられました。大野原町の東端部に位置する丸井地区縁塚一帯には、古墳遺跡のあることが伝承されていて、鐘子塚附近からは須恵器や装身具が出土した例があります。町教育委員会では、県教育委員会文化行政課のご指導とご援助を得て、昭和60年3月予備調査を実施し、遺構4基を確認するとともに、須恵基片多数を採取しました。この予備調査により大規模調査の必要ことが判明し、昭和60年8月から約1ヶ年余本調査をすすめてまいりました。調査が広範囲に及んだことと、調査期間も長期間を要したので、全体を3調査区に区分して実施しました。

第1調査区	5、10、11 号墳	自昭和60年8月至60年11月
第2調査区	7、12 号墳	自昭和61年1月至61年4月
第3調査区	1、2、3、4 号墳 13、14、15 号墳	自昭和61年5月至61年11月

調査区一帯は、柿畠やみかん畠に開墾されていて、3号、13号、15号の3基は遺構の殆どが破壊され、石室の基底石が残っていた古墳は、1号、2号、10号、11号、12号、14号の6基で他は石室の掘形が残っているに過ぎなかった、しかし全体では非常に多数の遺物を検出することが出来て、本町の文化財の歴史に新たな1ページを加えることが出来ました。

本調査報告書は第2、第3調査区の報告であります。

最後になりましたが、今回の発掘調査に当たって、終始熱心にご指導賜りました香川県教育委員会文化行政課をはじめご協力いただきました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月1日

大野原町教育委員会 教育長 藤川美男

# 例 言

1. 本書は、四国横断自動車道の大野原地区の建設に伴って、昭和60年度より昭和61年度に亘って実施した縁塚古墳群遺跡の発掘調査概要報告である。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会事務局文化行政課の指導の下大野原町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

## 総 括

大野原町教育委員会	教 育 長	藤 川 美 男
	教 育 課 長	石 川 毅
	前教育課長	高 木 茂 樹
	前教育課長	藤 田 茂
	前教育課長	菰 田 力

## 調査担当

元香川県文化財保護協会専門委員	高 橋 邦 彦
大野原町文化財保護協会 会員	真 鍋 和 三

## 庶務係

大野原町教育委員会	課長補佐	高 橋 剛 徳
	前主幹	守 谷 信 雄
	前主任主事	渡 辺 久美子

3. 執筆にあたっては、次のように執筆分担した。

第二、第三調査区	高 橋 邦 彦
図版・写真作成	真 鍋 和 三

4. 調査の実施や整理報告に際し下記の方々から多大のご協力を受けました。謝意を表します。

茨 木 義 応	合 田 春 雄	真 鍋 三 二	岡 田 恒 夫
山 田 恒 男	藤 川 正 晴	岡 田 ヨシエ	茨 木 シズ子
茨 木 シゲノ	山 田 正 美	小 出 トヨ子	井 上 シズ子
小 出 美智子	大 川 愛 子	石 川 笑己子	三 好 富士子

5. 本書に使用した遺構・出土遺物の実測図及び出土遺物は、大野原町教育委員会が保管している。



# 目 次

第1章 地理的環境	1
第2章 歴史的環境	3
第3章 調査の方法	5
第4章 調査の結果	14
[I] 第二調査区	14
(1) 7号墳	20
1 墳丘	20
2 出土品	23
(2) 12号墳	27
1 墳丘と石室	27
2 出土品	34
[II] 第三調査区	42
(1) 1号墳	48
1 墳丘と石室	48
2 出土品	53
(2) 2号墳	60
1 墳丘と石室	60
2 出土品	64
(3) 3号墳	68
1 出土品	68
(4) 4号墳	69
1 墳丘と石室	69
2 出土品	74
(5) 13号墳	76

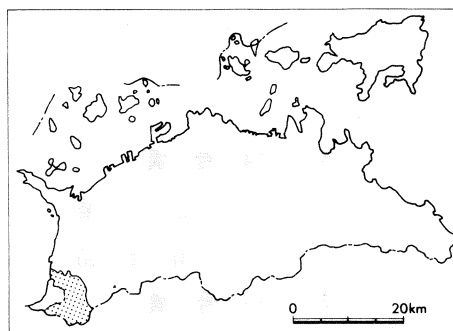
(6)	14号墳	76
	1 石室	76
	2 出土品	83
(7)	15号墳	112
	1 墳丘	112
	2 出土品	115
第5章 まとめ		117
図版		118

## 第1章 地理的環境

大野原町は、三豊平野の西端部に位置し、南部は雲辺寺山系をいただき、その山麓の丘陵地から西方燧灘に向って展開する平野部からなっており、丘陵地の裾野を柞田川が北流している。雲辺寺山（標高911m）の山頂から西北山麓にかけての和泉層には、明治初年に大野原村外近隣、7ヶ村が組合をつくって植林をした部分林が緑をたたえており、山麓の大部分は洪積層で、雲辺寺ヶ原と呼称する上位台地を形成しており、平野との境界部分には、三豊層が帯状に分布している。縁塚古墳群は、海拔約60mのこの三豊層の上に営まれたもので、柞田川の中流の東方約300mの丘陵地に位置した三度笠風の互いに重なり合った三つの丘陵からなっている。附近には、大池・羽子池・瀬戸池・大谷池など溜池が点在しており、東方約100mには柞田川の支流である大池川が北流して灌がい用水の水源地となっている。

大池川並びに柞田川の流域は、雲辺寺ヶ原台地に深く喰い込んだ渓谷で水利に恵まれ、風雨による災害の少ない地域で古代稲作文化の発祥には好適であったと想像される。

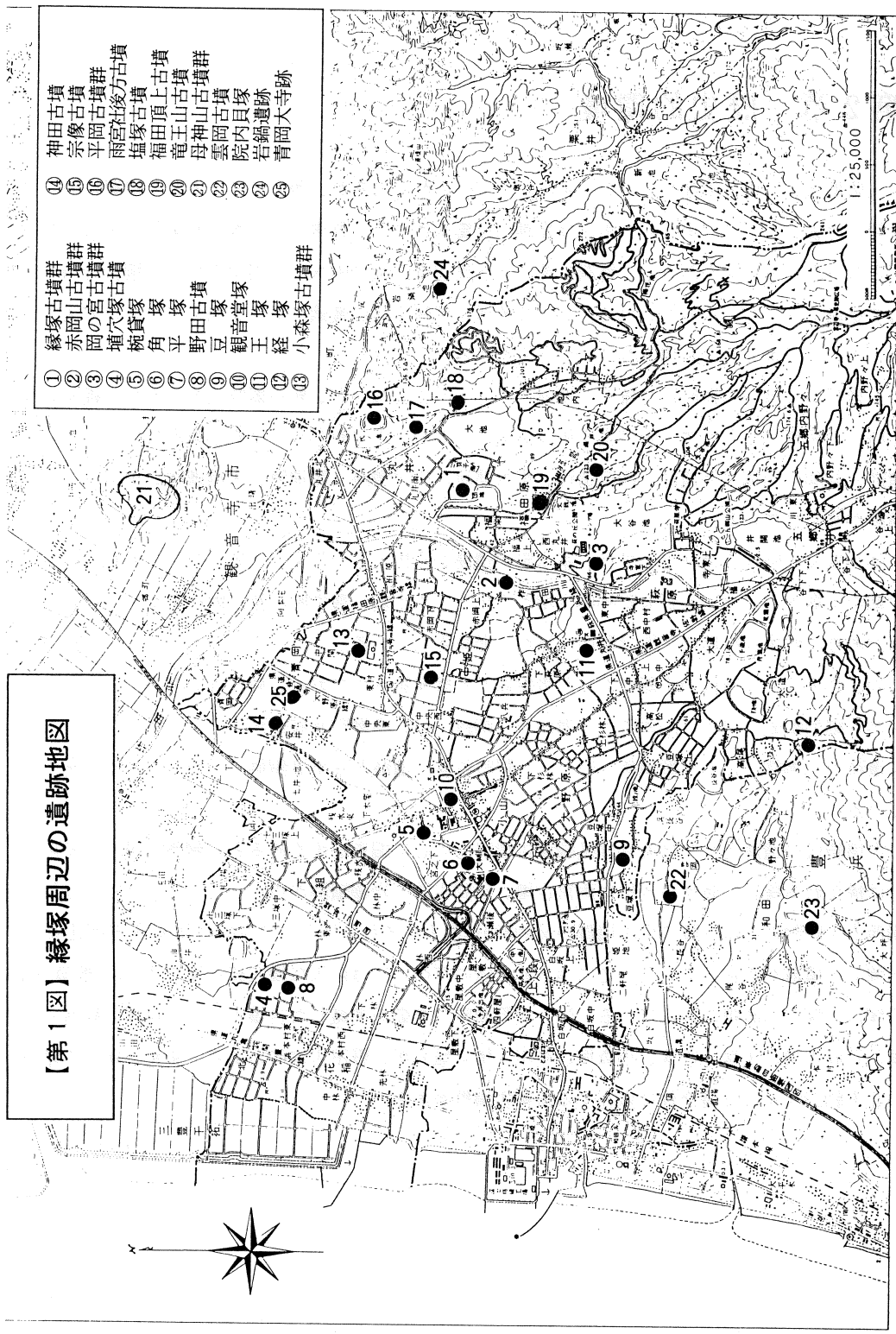
又、附近一帯の丘陵地は、雑木の繁茂した台地で動物の棲息には最適の台地であったと思われるが大正初期の頃、養蚕業の隆盛とともに桑畑に開墾され、その後、時代の変遷とともに現在の柿畠、みかん畠に変わってきた。



大野原町位置図

【第1図】縁塚周辺の遺跡地図

- |          |           |
|----------|-----------|
| ① 縁塚古墳群  | ⑭ 神田古墳    |
| ② 赤岡山古墳群 | ⑮ 宗像古墳    |
| ③ 岡の宮古墳  | ⑯ 平岡古墳群   |
| ④ 埴穴塚古墳  | ⑰ 雨宮社後方古墳 |
| ⑤ 椀貫塚    | ⑱ 堀塚古墳    |
| ⑥ 角平塚    | ⑲ 堀塚頂上古墳  |
| ⑦ 野田塚    | ⑳ 福田山古墳   |
| ⑧ 豆塚     | ㉑ 母神山古墳   |
| ⑨ 観音塚    | ㉒ 雲岡古墳    |
| ⑩ 王塚     | ㉓ 院内貝塚    |
| ⑪ 経塚     | ㉔ 岩鍋遺跡    |
| ⑫ 小森塚古墳群 | ⑳ 青岡大寺跡   |



## 第2章 歴史的環境

三豊郡は北・東・南部の三方が山系によって囲まれているが、西方は洋々とした燧灘に面して眺望に恵まれている。東北部の雨水は高瀬川に集水されて三野津湾に注ぎ、南東部の雨水は財田川となり郡の中央部を西下して燧灘に流入し、雲辺寺山系の雨水は柞田川となって観音寺市を流れて燧灘に流下している。これら三河川の流域は農耕生活に最適の条件を備えているので大古から人々の住居地として利用されていたと思われる。

三豊郡内には旧石器時代の確かな遺跡は発見されていないが、新石器時代を迎えての縄文式文化時代の早期遺跡として、穀粒文を施した尖底土器の出土で有名な仁尾町小蔦島貝塚、同南草木遺跡、詫間町の蟻の首遺跡、西浜遺跡、東浜遺跡、生里遺跡、箱遺跡、大浜遺跡、豊浜町の院内遺跡が知られている。

弥生式文化時代の遺跡としては、室本町の遺跡から出土した弥生式土器が有名であり、弥生式中期の土器としては、大野原町神田古墳から出土した土器、豊中町、及び財田町から出土した土器があり、弥生式後期の土器は郡内広域から発見されている。

尚、弥生式文化時代の宝器であった青銅器も多数発見されており、観音寺市菩提山の藤の谷遺跡から細型銅剣三口が、山本町辻西遺跡から銅鉾一口、高瀬町北條遺跡から平型銅剣三口、同羽方遺跡から銅鐸一口、平型銅剣一口が、三野町弥谷山遺跡から平型銅剣五口が、それぞれ出土している。

古墳時代の遺跡としては丸井地区縁塚古墳群を中心に調査をすすめると、縁塚の東方500米附近に横たわる緩い丘陵性の台地に雨宮古墳、平岡古墳・岩鍋遺跡が点在しており、これとは反対側西方1km附近には、岡の宮古墳群が又約300m西方を流れる柞田川の左岸に接する赤岡山には赤岡山古墳群が点在している。更に西方約2kmの宮の下には巨大な横穴式石室で著名な椀貸塚、角塚、平塚が一直線に並んでいる。尚、大野原町内で姿を消滅した古墳として、豆塚、観音堂古墳、石砂古墳、王塚、経塚、小森塚、神田古墳、埴穴塚、野田古墳等がある。また、縁塚古墳群の北方約2300mに丘陵全体に点在する母神古墳群がある。



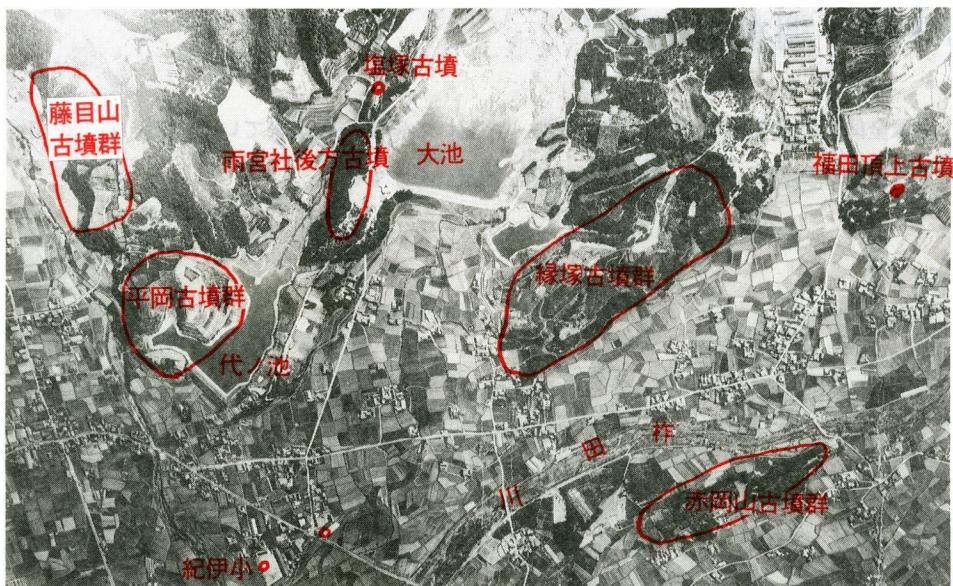


写真1 縁塚附近の遺跡

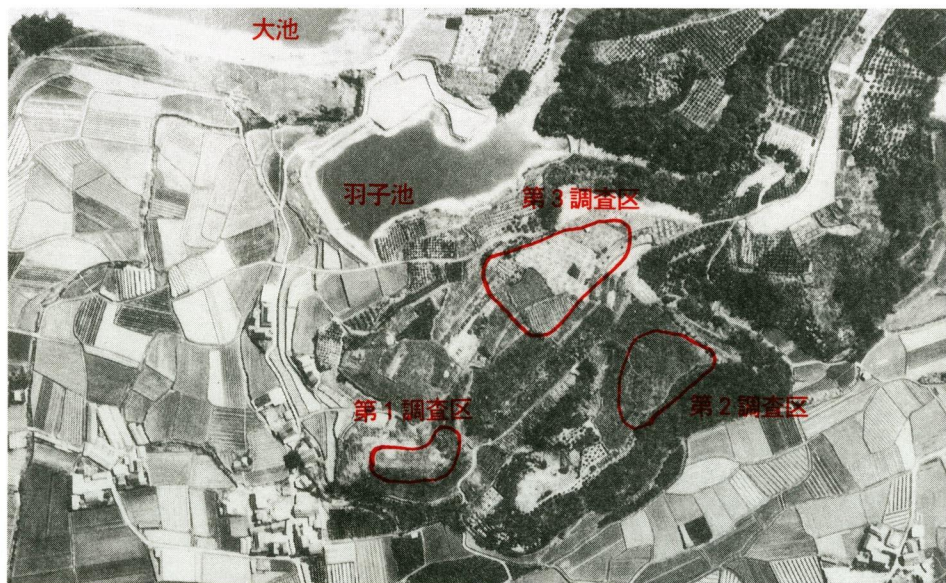
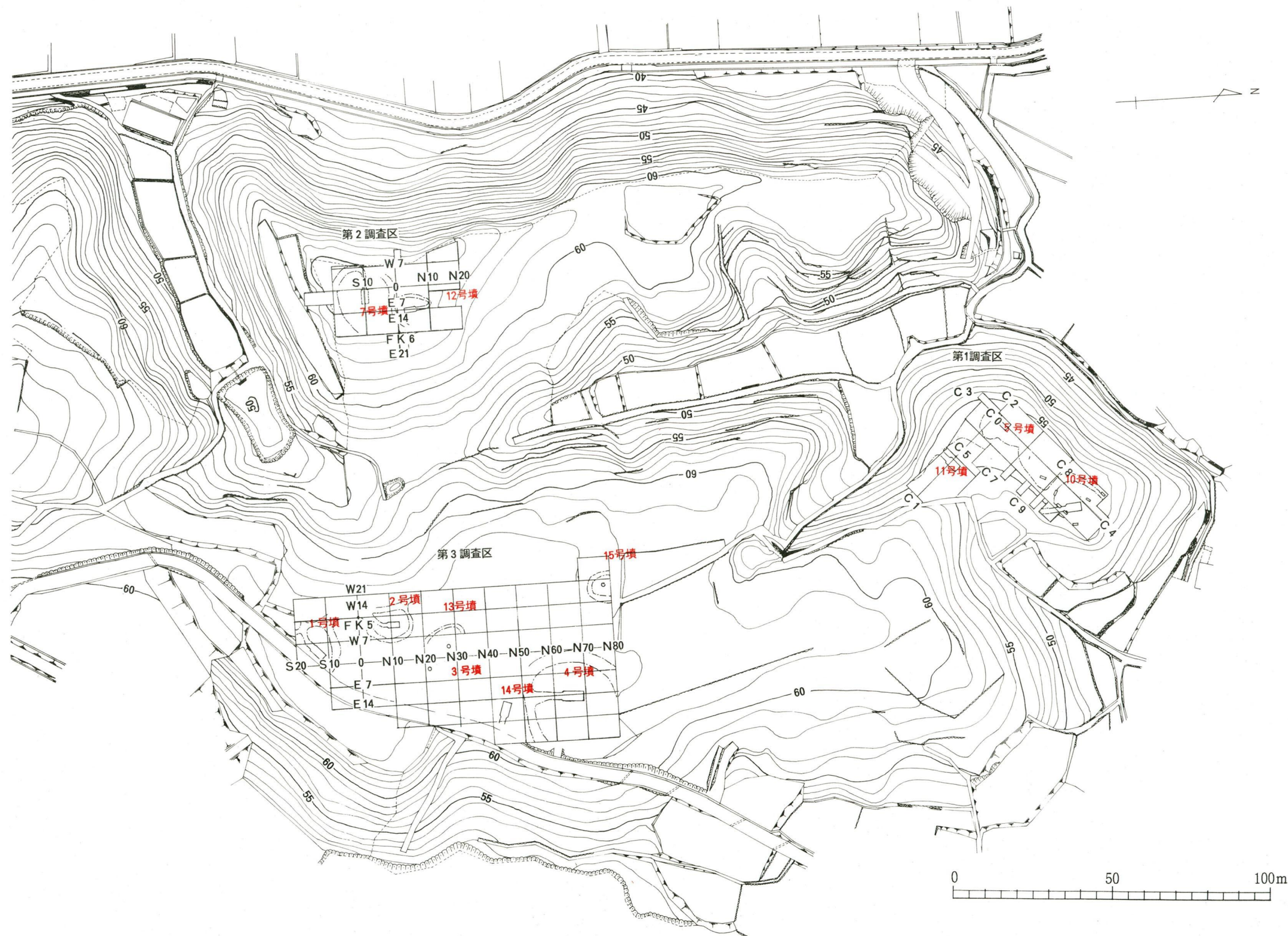


写真2 縁塚全景

### 第3章 調査の方法

縁塚全体は三度笠風の互いに重なりあった三つの丘陵から出来ているので、第1調査区（報告済み）第2調査区、第3調査区に分離して調査をすすめた。



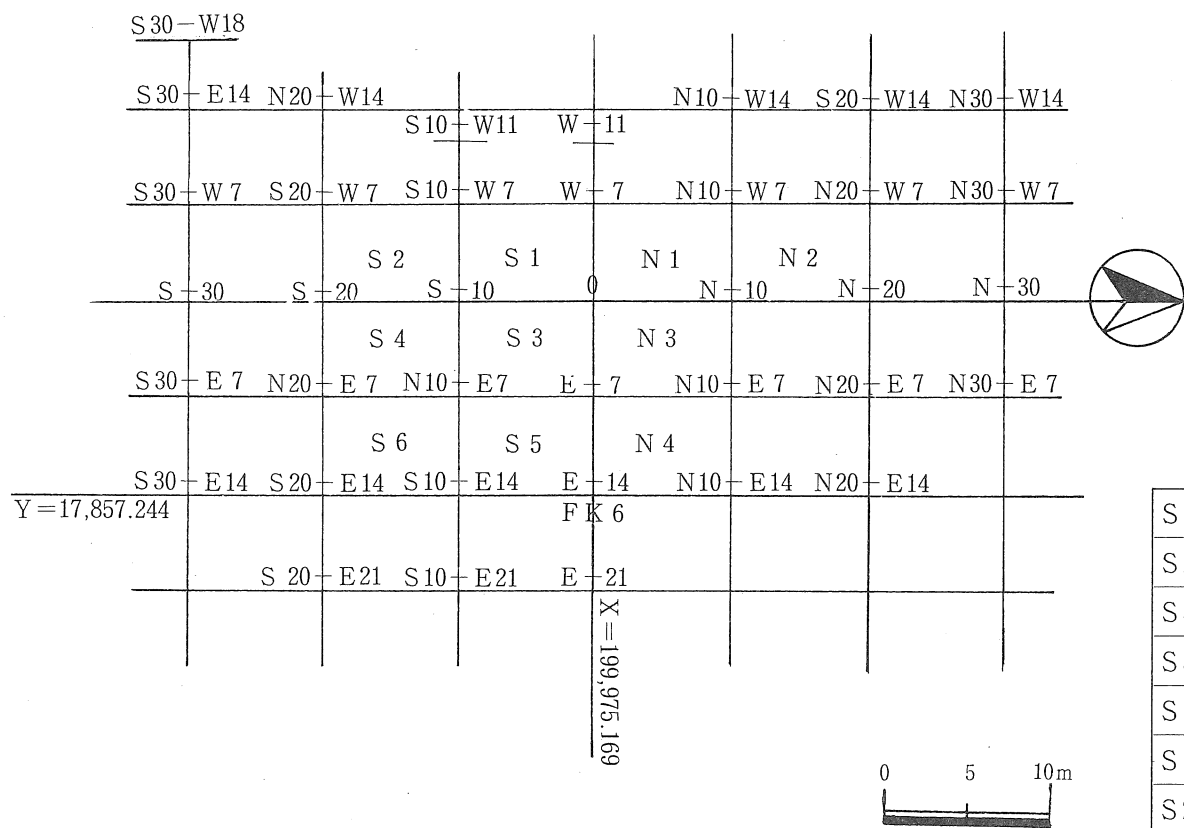


第2図 縁塚古墳群調査区全図 - 6~7 -

(1) 第二調査区

FK 6 (X=119,975.169 Y=17,857.244) を基点として、東西7 m、南北10mの長方形に区画し、その測点・グリッドの名称および地盤標高については、縁塚古墳群第二調査区基準杭設置位置図に示す。なお、遺構等の実測は1/10と1/20の縮尺で実施し、必要に応じて使い分けることとした。

縁塚古墳群 第2調査区 基準杭設置位置図



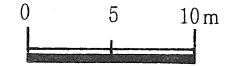
第2調査区基準杭標高一覧表

測点	杭点標高	地盤標高
0	65.183	65.07
N-10	64.523	64.32
N-20	63.237	63.09
N-30	61.924	61.76
E-7	64.999	64.85
E-14	64.570	64.49
E-21	63.622	63.44
S-10	65.281	65.20
S-20	65.434	65.21
S-30	62.134	61.80
W-7	65.040	64.84
W-11	63.784	63.57
N10-E7	64.532	64.35
N10-E14	63.617	63.46
N20-E7	62.311	62.12
N20-E14	62.159	61.97
N30-E7		
N10-W7	64.845	64.58
N10-W14	63.553	63.32
N20-W7	63.981	63.79
N20-W14	64.141	63.96
N30-W7	62.858	62.68
N30-W14	63.037	62.79
S10-E7	65.101	64.96
S10-E14	64.809	64.63
S10-E21	63.875	63.66
S20-E7	65.233	65.00
S20-E14	64.450	64.18
S20-E21	62.640	62.44
S30-E7	61.612	61.34
S30-E14	61.486	61.26
S10-W7	65.398	65.21
S10-W11	64.110	63.94
S20-W7	65.469	65.31
S20-W14	64.375	64.20
S30-W7	63.386	63.14
S30-W14	63.397	63.14
S30-W18	63.446	63.23

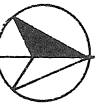
(2) 第三調査区

FK 5 (X=119,956.380 Y=17,945.564) を基点とし、東西7m、南北10mの長方形に区画した。その測点・グリッドの名称および地盤標高については、縁塚古墳群第三調査区基準杭設置位置図に示す。なお、遺構の実測は1/10と1/20の縮尺で実施し、必要に応じて使い分けることとした。

縁塚古墳群 第3調査区 基準杭設置位置図



S 20	W 21	S 10	W 21	W 21	N 10	W 21	N 20	W 21	N 30	W 21	N 40	W 21	N 50	W 21	N 60	W 21	N 70	W 21	N 80	W 21
					0-6	10-6	20-6	30-6	40-6	50-6	60-6	70-6								
S 20	W 14	S 10	W 14	W 14	N 10	W 14	N 20	W 14	N 30	W 14	N 40	W 14	N 50	W 14	N 60	W 14	N 70	W 14	N 80	W 14
				FK 5																Y = 17,945.564
				0-5	10-5	20-5	30-5	40-5	50-5	60-5	70-5									
S 20	W 7	S 10	W 7	W 7	N 10	W 7	N 20	W 7	N 30	W 7	N 40	W 7	N 50	W 7	N 60	W 7	N 70	W 7	N 80	W 7
				0-4	10-4	20-4	30-4	40-4	50-4	60-4	70-4									
S 20		S 10			N 10		N 20		N 30		N 40		N 50		N 60		N 70		N 80	
				0-3	10-3	20-3	30-3	40-3	50-3	60-3	70-3									
		S 10	E 7	E 7	N 10	E 7	N 20	E 7	N 30	E 7	N 40	E 7	N 50	E 7	N 60	E 7	N 70	E 7	N 80	E 7
				0-2	10-2	20-2	30-2	40-2	50-2	60-2	70-2									
				E 14	N 10	W 14	N 20	W 14	N 30	W 14	N 40	W 14	N 50	W 14	N 60	W 14	N 70	W 14	N 80	W 14
						20-1	30-1	40-1	50-1	60-1	70-1									
							N 20	E 21	N 30	E 21	N 40	E 21	N 50	E 21	N 60	E 21	N 70	E 21	N 80	E 21
				X = 119,956.380																
										N 40	E 28	N 50	E 28	N 60	E 28	N 70	E 28	N 80	E 28	







## 第4章 調査の結果

### [ I ] 第二調査区 (第3・4図)

本調査区は南側面及び西側面が急斜面であり、北及び東方向はやや緩やかに傾斜している。昭和の初め雑木林を開墾し、果樹園として耕作されてきた処である。したがって、頂上附近は標高65m程度に削平され、表層部には幅70cm～100cm、深さ50cm～70cmの施肥溝が網の目のように掘削されており、2基の遺構とも破壊されていた。



写真 3 第2調査区 南西より

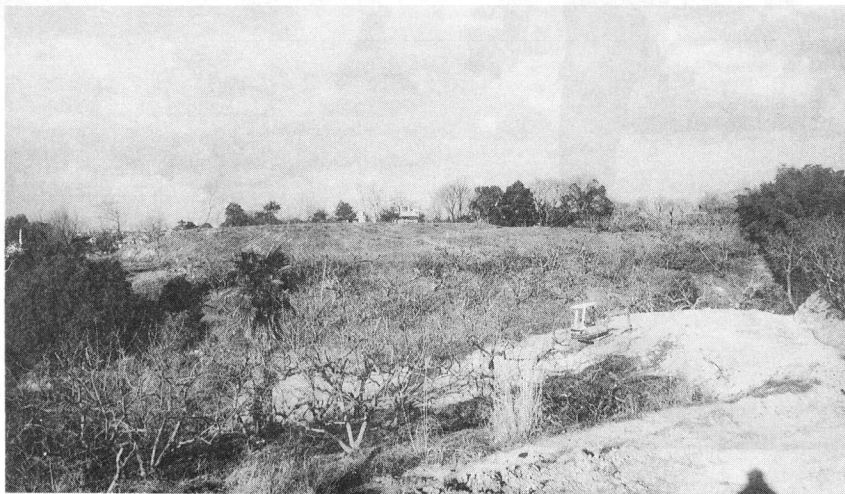
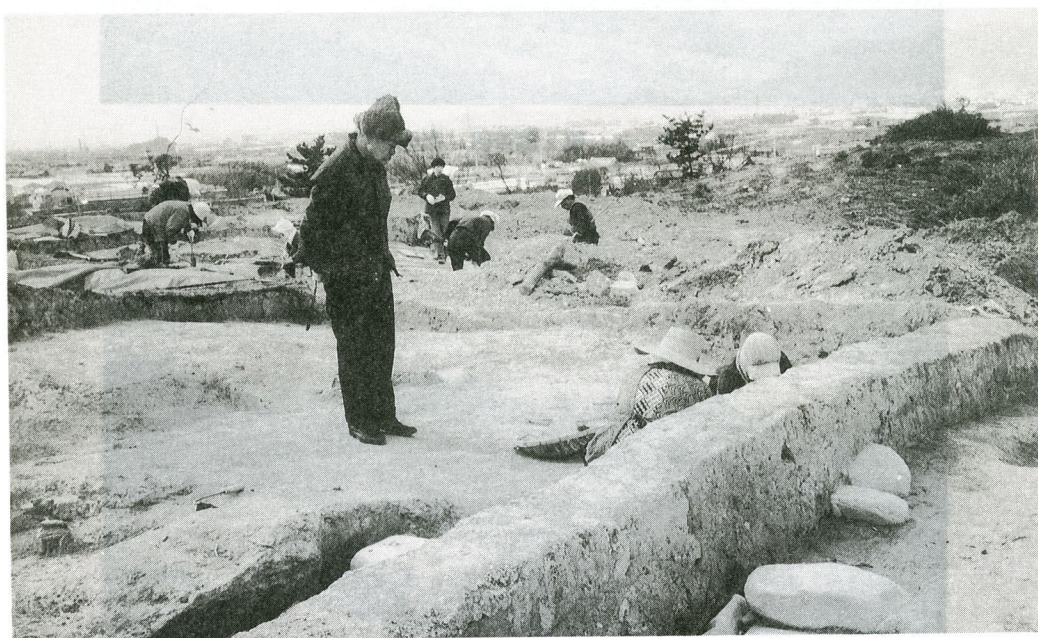


写真 4 第2調査区 東より

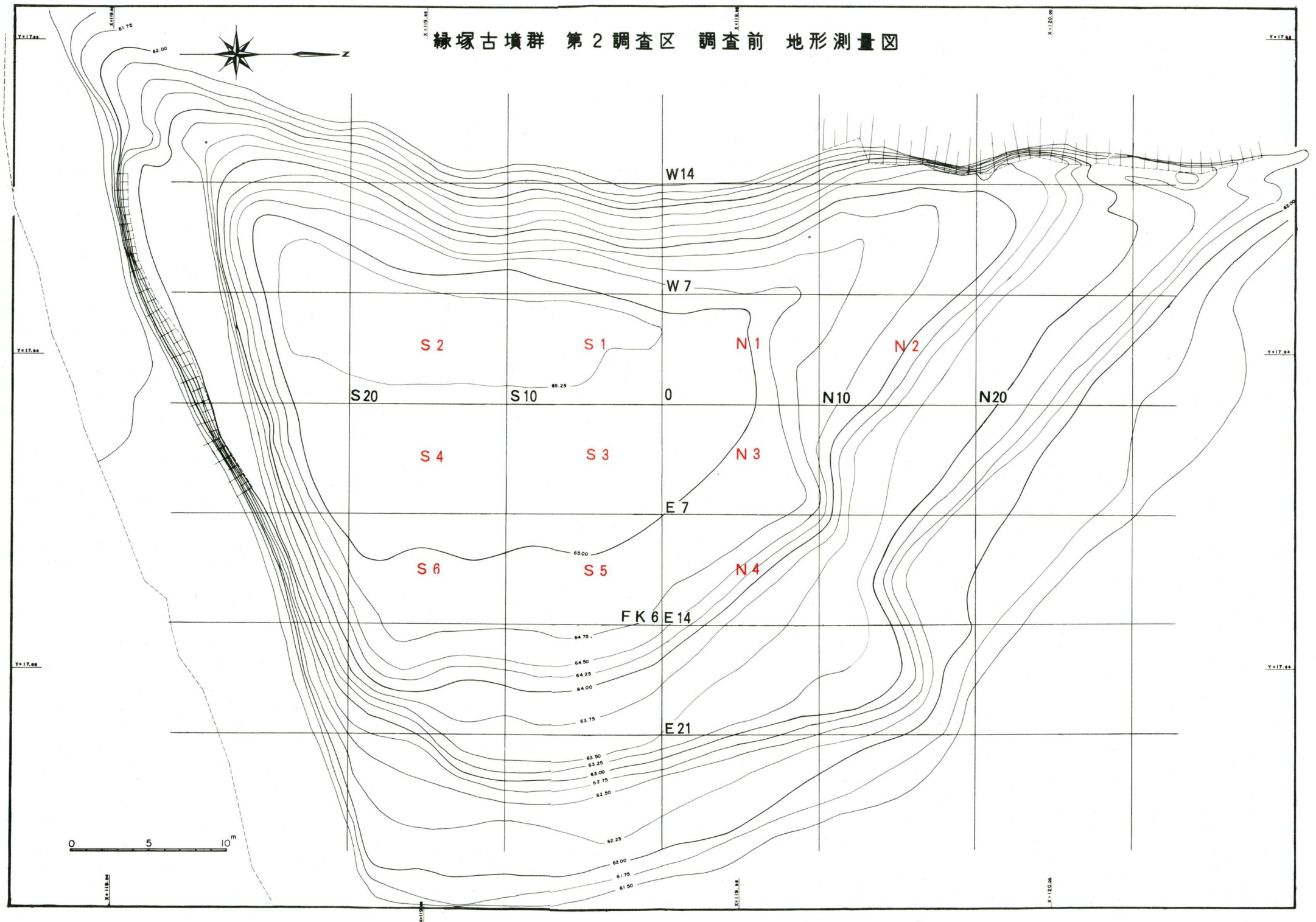


写真 5 第2調査区 調査後全景

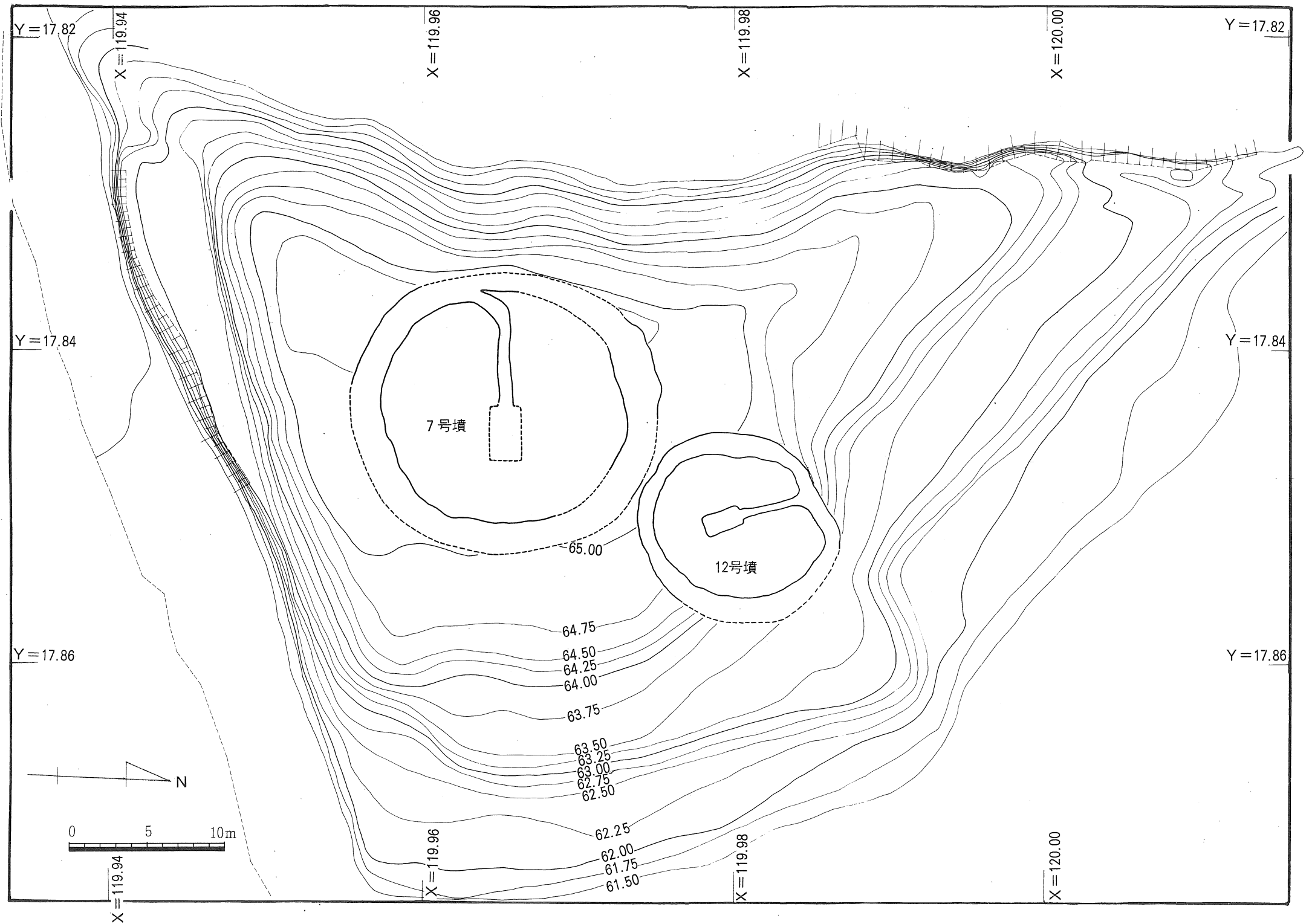


縁塚第2調査区 発掘調査作業風景





第3図 第2調査区全図 (調査前)



第4图 7号墳・12号墳配置图



### (1) 7号墳(第5図)

最頂部に位置し、最も破壊を受けて、辛うじて天幅2m、直径16m程の周濠とその西端より中心(東)にむかった幅80cm、長さ3m程の墓道とこれに続く羨道の基底石の掘り形(長さ2m30cm、幅60cm程)を検出した。羨道に続く玄室と想定される区域は削平され、基底石の掘り形は遂に検出できなかった。しかし、砂利と粘土の混じった攪乱層から枕石と思われる三日月形の長さ38cm、幅15cm、厚さ7cmの川原石と、ガラス小玉の破片、鉄刀片を検出した。尚、周濠の西南部、北西部、北東部から須恵器片を検出した。

7号墳は見晴らしの良い西方に開口した直径16cmの周濠を伴う横穴式石室の円墳であると推考する。



写真6 7号墳

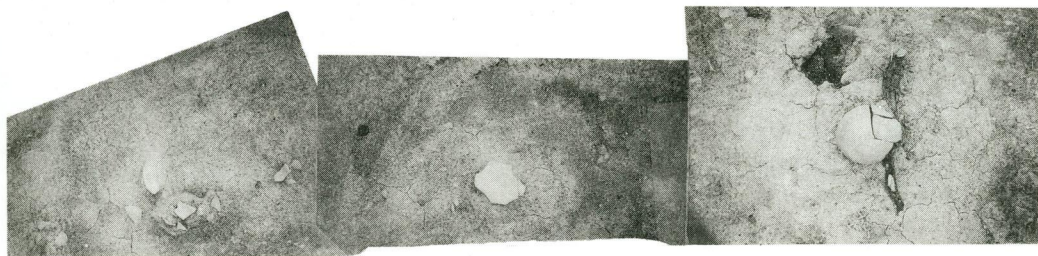


写真7 7号墳周濠内土器出土状況 ①



写真8 7号墳周濠内土器出土状況 ②



第5图 7号墳実測図

## 出土品について

### 広口短頸埴(1) (第6図)

器高8cm、口径8.5cm(口縁部欠失のため推定寸法)、体部最大径11.4cm。頸部はわずかに残存している。器体部は径に比して器高が低く餅状を呈している。器体部の上半は回転ハケナデ調整、下半は回転ヘラ削り調整、内面はユビナデ調整による有蓋短頸埴である。

### 広口短頸埴(2) (第6図)

器高8.5cm、口径9.2cm、頸部の高さ3cm、体部最大径11.6cm。口頸部は直立し、口縁端部には丸味がある。器体部は肩の張りは少なく、体底部は、丸底で回転ヘラ削り調整が施されている。

### 埴蓋(第6図)

器高3.7cm、口径10.5cm。頂部はヘラ削り調整が施され、口縁端部は段をなし内傾している。

### 坏蓋(1) (第6図)

器高4.2cm、口径15cm。天井部はヘラ削り未調整であり、口縁部との境界付近には、浅い沈線が施されている。口縁部は丸味を持ちつつ「ハ」字型に外反しているが、端部は内傾し、丸く仕上げている。

### 坏(第6図)

器高4.1cm、口縁部径15.1cmで、器体部外面は、底部をヘラ削りの後、ナデ調整が施されている。立ち上がりは外反しつつ内傾し、端部は丸く仕上げている。



写真9 広口短頸埴(1)



写真10 広口短頸埴(2)

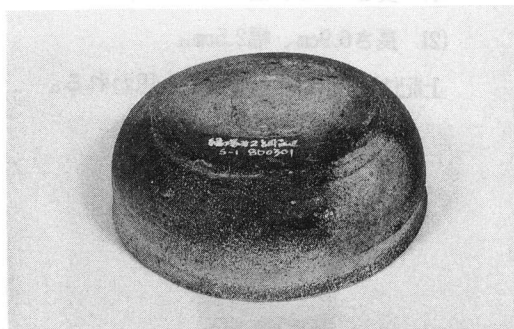


写真11 埴蓋

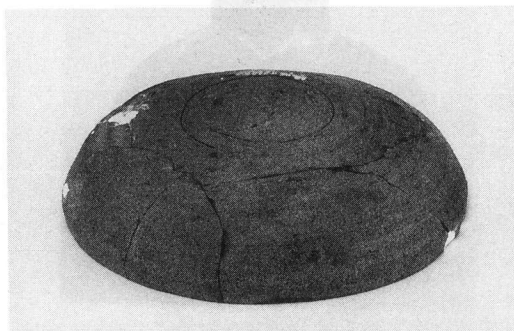


写真12 坏蓋

台付長頸壺（第6図）

台部は基部から欠失しているので器高の計測は不能。頸部高8cm、器体部高9.1cm、器体部最大径13.4cm、口径7.0cm、口頸部径4.7cmである。口頸部の中程に二条の沈線があり、器体肩部にも二条の沈線がある。肩部より下部はヘラ調整がなされている。



写真13 坏

甕（第7図）

口縁部は欠失している。口頸部は緩やかに外反し、上部に二条、基部に三条の沈線をほどこし、その間にヘラがきによる文様帯がある。体部は高さ18.2cm、最大径23.4cmで、肩部にやや張りがあるものの、ほぼ球体をなし、底面はおおむね平らになっている。外面は格子叩きの後カキ目調整をしている。内面は同心円・円弧叩きを施している。

小玉

紺青のガラス小玉の破片4個を検出した。

鉄刀片（第8図）

- (1) 長さ7.8cm、幅3.1cm。
  - (2) 長さ6.9cm、幅2.5cm。
- 上記(1)・(2)は同一固体かと思われる。



写真15 甕

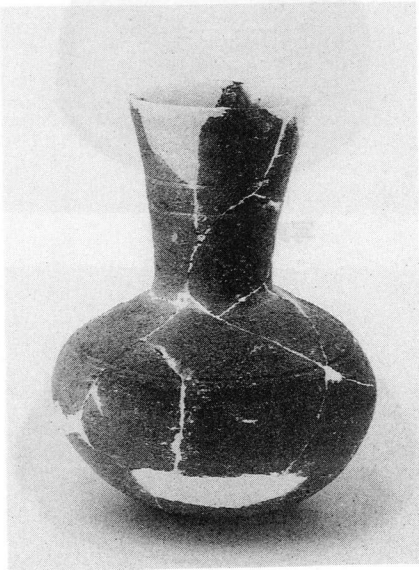


写真14 台付長頸壺

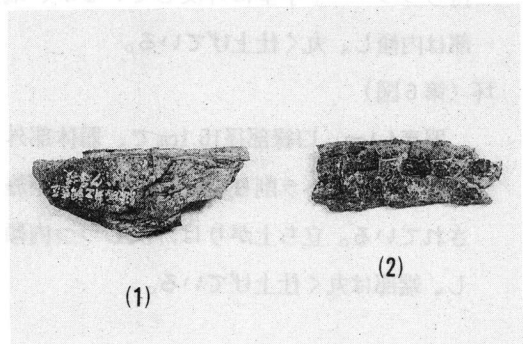
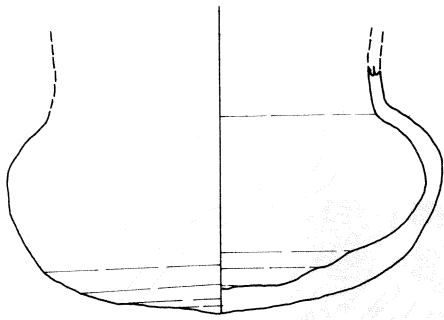
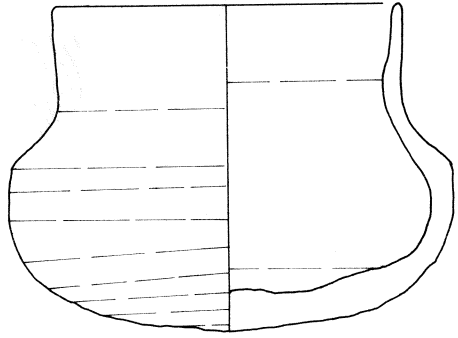


写真16 鉄刀片

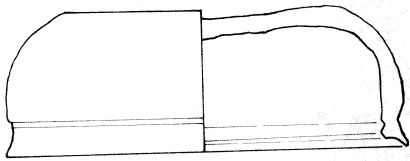
広口短頸罎 (1)



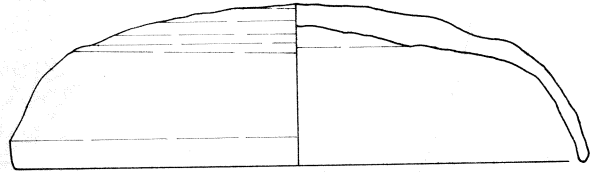
広口短頸罎 (2)



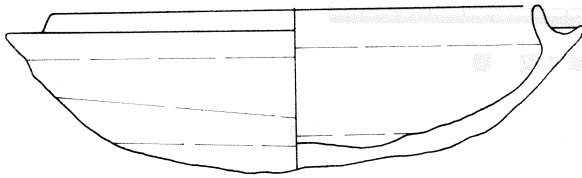
罎蓋



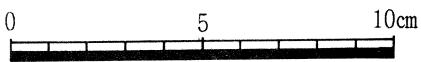
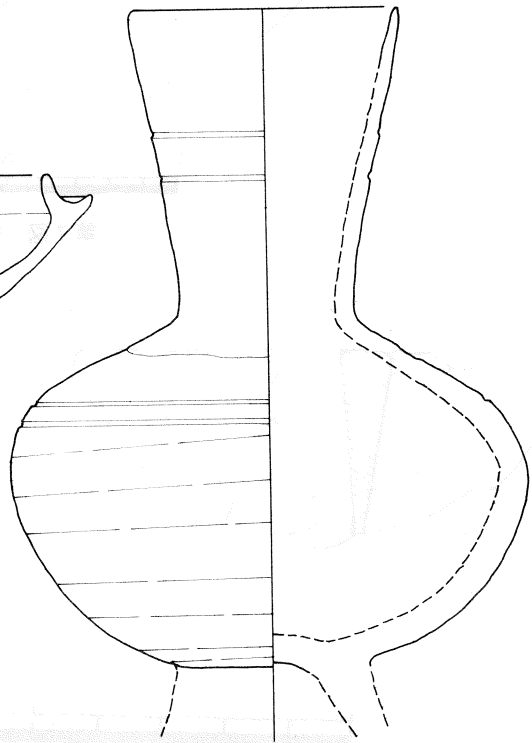
罎蓋



罎



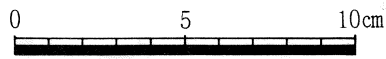
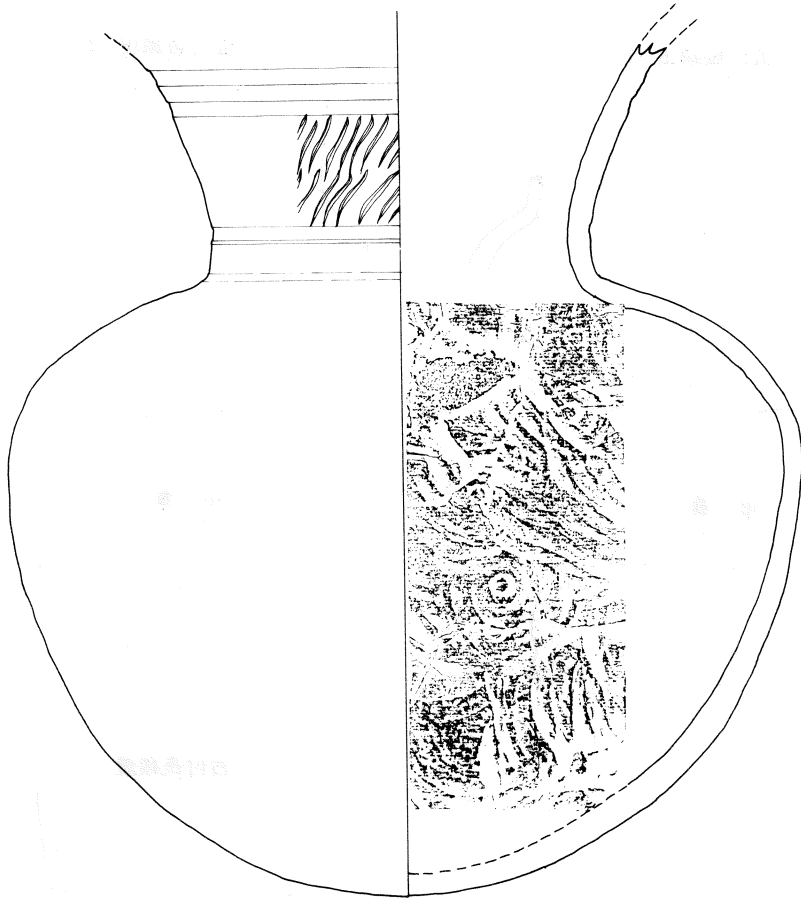
台付長頸壺



第 6 図

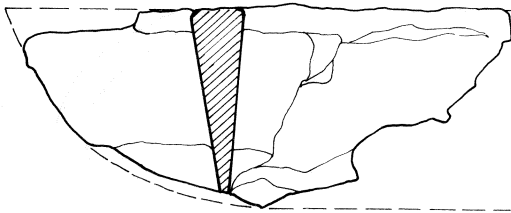


甕

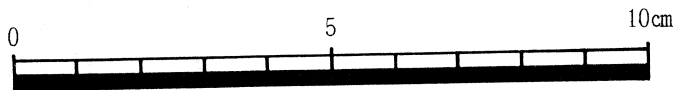
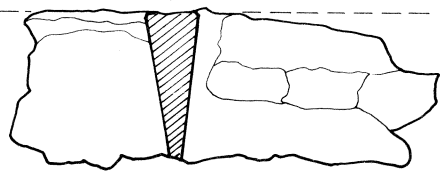


第7図 甕

(1)



(2)



第8図 鉄刀片

(2) 12号墳 (第9・10・11図)

12号墳は7号墳より北東に15mの地点、緩い膨らみを示しつつ下降する北面に位置する。

天幅1m~1.8m、直径11m程度の周濠に囲まれた円墳と推考される。

主体部はN-9°-Wに主軸を

取り、北北西に開口する両袖式の横穴式石室である。石室の上部は破壊されていたが、礫床部は良好に遺存されていた。石室の規模は玄室の長さ2.7m、奥壁の幅0.85m、玄門側の幅0.75m、最大幅は1.30mを測り、側壁は胴張りを呈している。羨道は西側壁の石が抜き取られているが、幅0.6m、長さ1m程度と推定され、墓道の2mがこれに続き周濠に至る。石室には比較的長大な川原石を使用し、奥壁を除いて玄室、羨道ともに小口積みに構築されている。石室内の内部は基底石を据えた後に淡赤褐色の粘土を4cm程度の厚さに敷き詰め、その面から排水溝が掘り込まれている。排水溝は断面が(V)字形で、玄室の中程から墓道にかけて、中央に真直に穿たれており、その長さ約4.5mである。また、排水溝は扁平な川原石の蓋石で全面にわたって覆っている。床面は三層構造となっている。即ち、下層の奥半分は長さ10cm~20cmの方柱状の石を並列状に敷き詰め、残り半分(玄門側)には、平板状の川原石を平らに敷き詰め、中層には3cm~5cm程度の太い砂利、さらに上層には1cm~2cmの細かい砂利を敷き詰めて礫床を形成している。尚、奥壁に近い上層には敷石とは

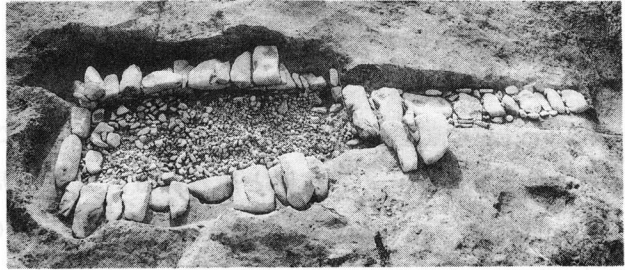


写真19 12号墳主体部(石礫床上層部)

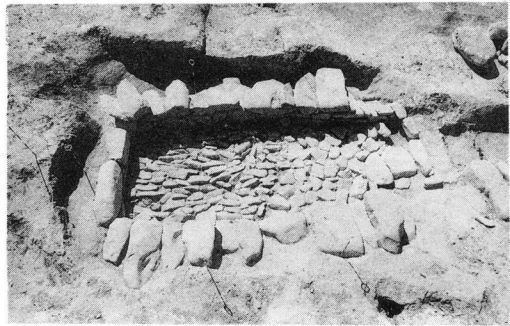


写真20 12号墳主体部(石礫床下層部)

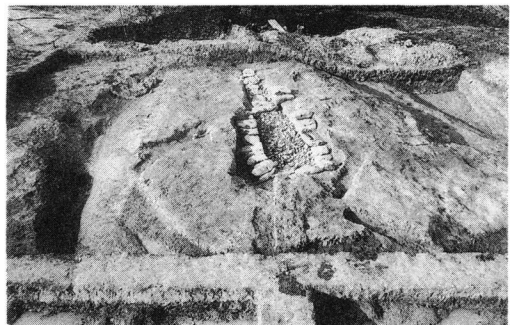


写真21 12号墳全景

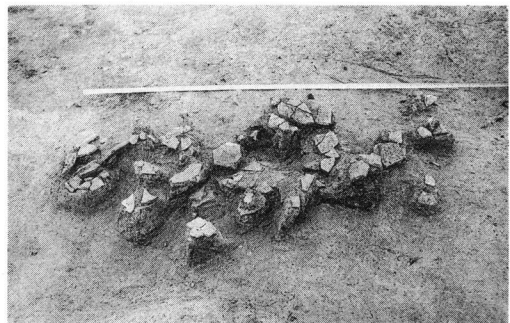


写真22 12号墳周濠内 北西部土器溜り

石とは別に長さ15cm～30cmの石材が長方形に並べられており、棺台として設置した可能性もあると推考される。また、玄門には仕切り石が据えられていた。北東の墳麓には周濠の底面より約1.5m上位に直径約20cmのピットが9個が約50cm間隔で一列に並んでいた。これは封土の崩れを防止する土止めの杭跡と思われる。また、周濠の南東部には5個のピットが1.2m間隔で1列に並んでいた。なお、周濠内の二ヶ所（北西部・南東部）に土器だまりを検出した。

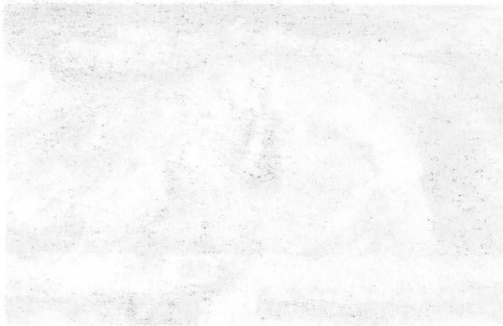
【撮影者】 藤原 隆平



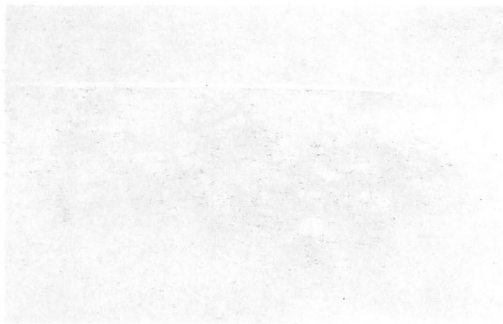
写真23 12号墳周濠内 南東部土器溜り



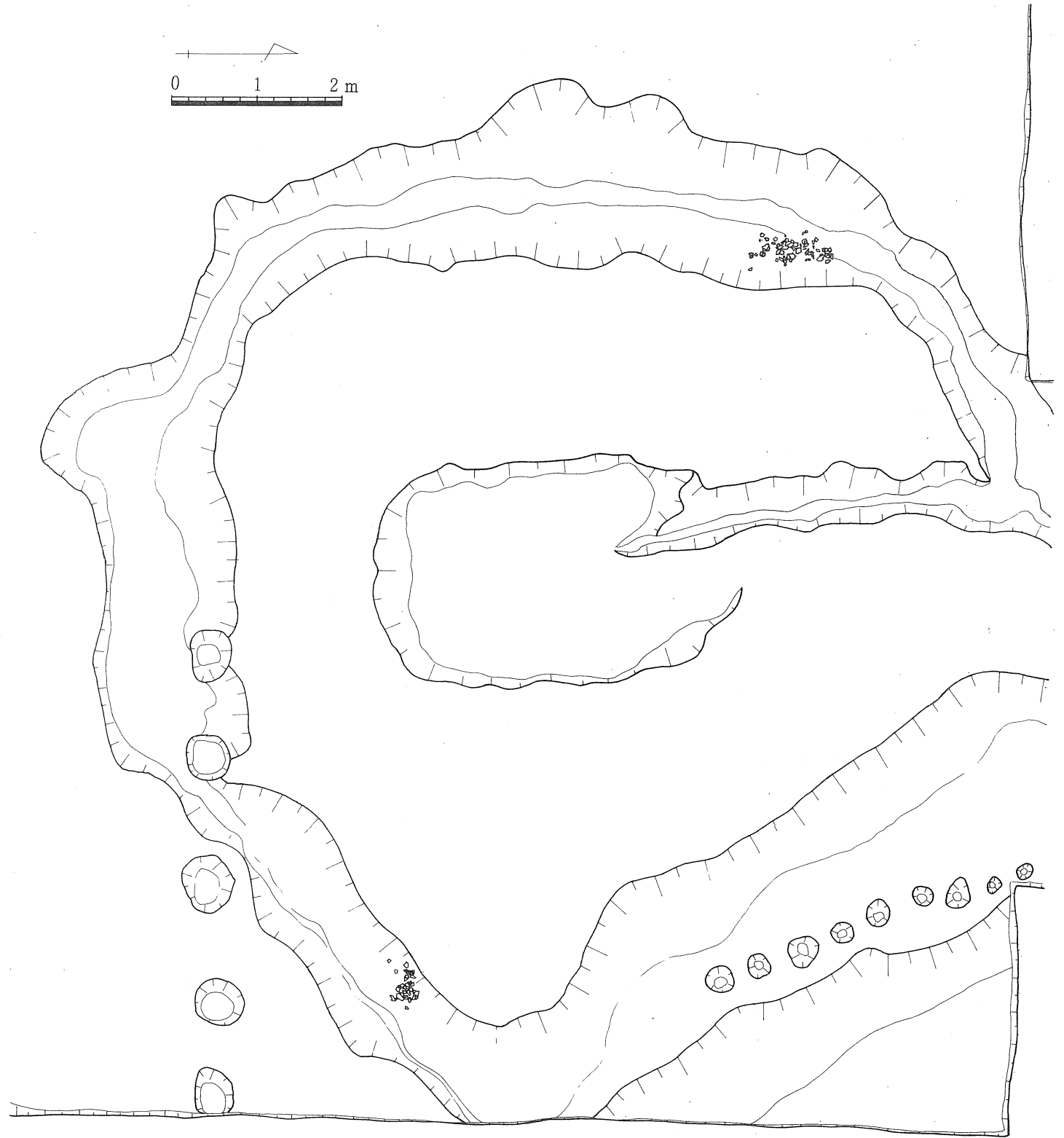
写真24 12号墳 排水溝



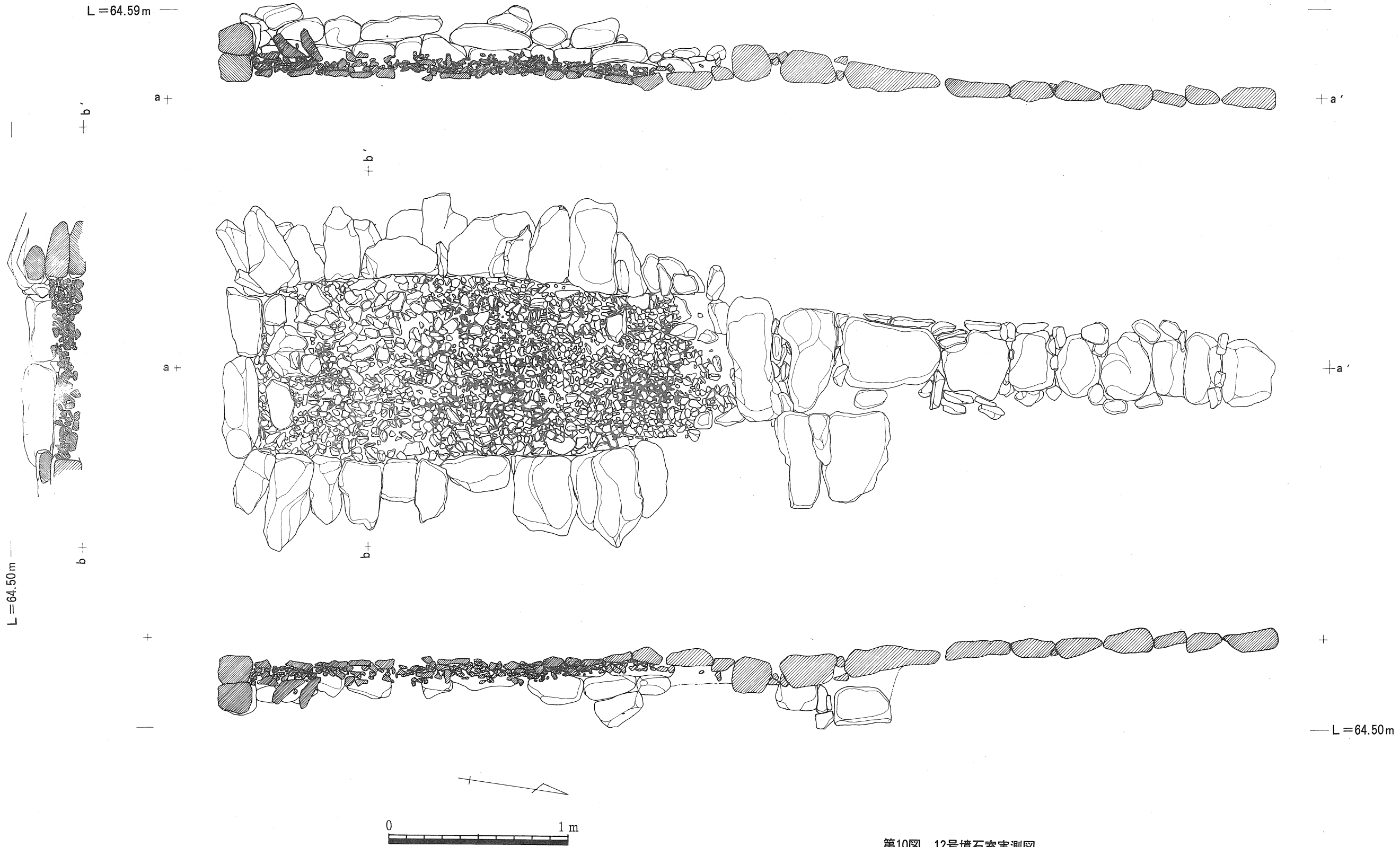
【撮影者】 藤原 隆平



【撮影者】 藤原 隆平

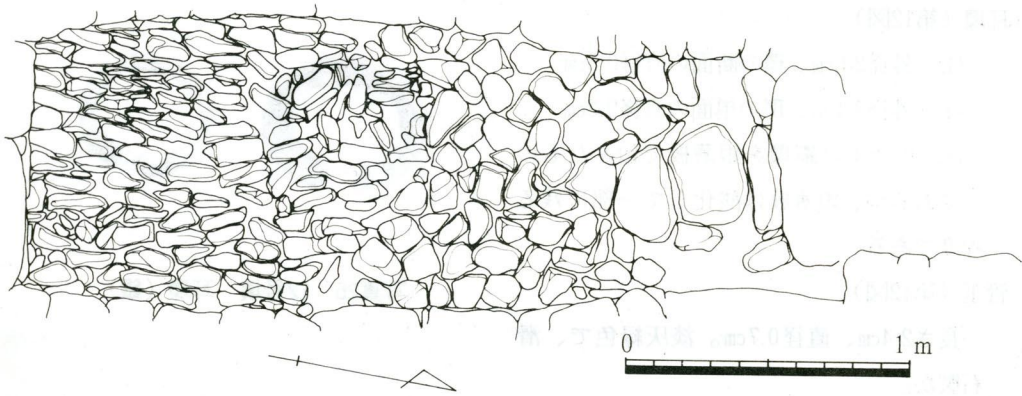


第9图 12号墳实测图

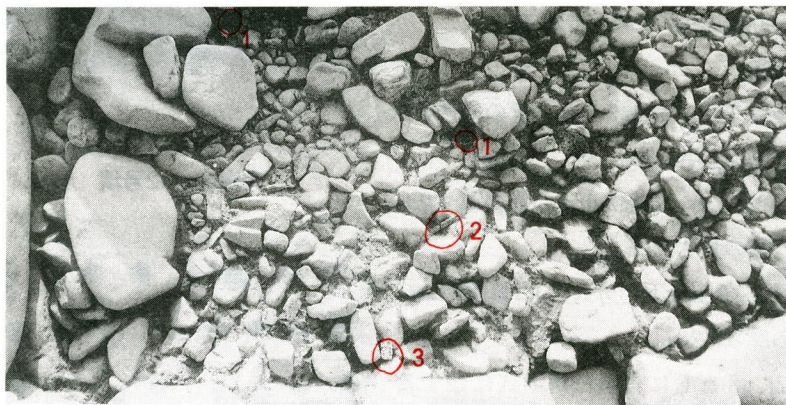


第10图 12号填石室实测图



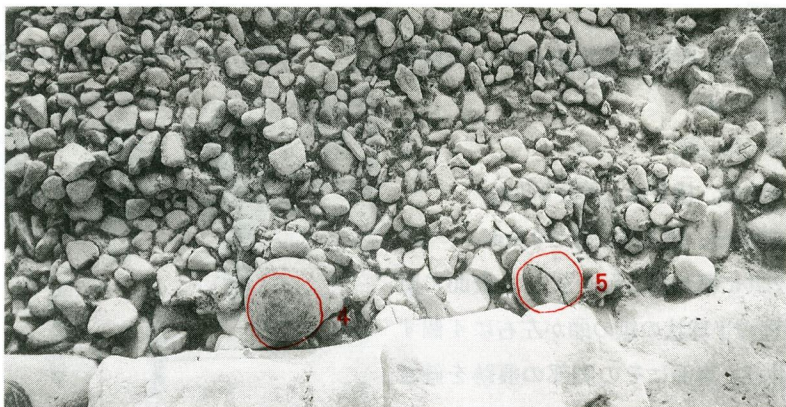


第11図 12号墳玄室磔床下層部実測図



- 1. 耳環
- 2. 刀子
- 3. 鋳付飾金具

写真17 玄室内遺物出土状況



- 4. 坏蓋
- 5. 有蓋埴

写真18 玄室内遺物出土状況

## 出土品について

### 耳環（第12図）

- (1) 外径2.6cm、環の断面の直径0.5cm
  - (2) 外径2.1cm、環の単面の直径0.2cm
- (1)、(2)ともに銅環を銀薄板で包んだものであるが、銀薄板は酸化して一部に残る程度である。

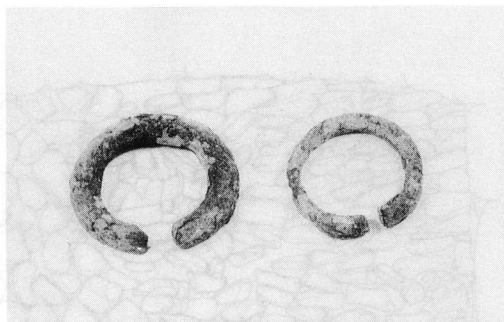


写真25 12号墳 耳環（銀）

### 管玉（第12図）

長さ2.4cm、直径0.7cm。淡灰緑色で、滑石製か。

### 小玉（第12図）

紺青色32個、緑青色2個、合計34個。直径0.3cm～0.8cmのガラス玉である。

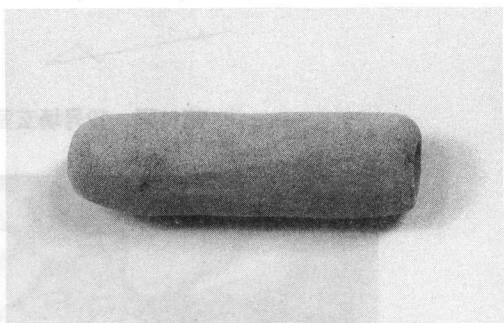


写真26 12号墳 管玉

### 鉄鏃（第12図）

- (1) 長さ7cm、鋒幅2.3cm、背の厚さ0.5cm、茎の長さ2.7cm。
- (2) 長さ5.1cm、鋒幅2.5cm、背の厚さ0.6cm、茎の長さ1cm。
- (3) 長さ3.7cm（下半分欠失）、鋒幅2.5cm、背の厚さ0.2cm。

(1)、(2)、(3)ともに有茎三角形式に類するものである。このほかに鉄鏃の茎を2個を検出した。

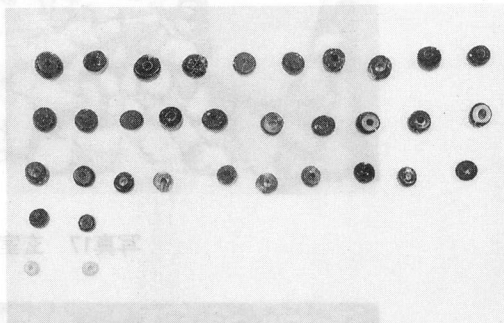


写真27 12号墳 小玉（白玉）

### 鉄錐（第12図）

長さ12.5cm、断面は方形を呈し、先端が細くなっている。

### 鉾付飾金具（第12図）

- (1) 縦3cm、横2cm、厚さ0.2cm。
  - (2) 縦3.8cm、横2cm、厚さ0.2cm。
- (1)、(2)共に概ね長方形を呈し、表面に直径0.5cm程の半球状の鉾の頭が左右に4個ずつ縦に並び、裏面にその脚部の痕跡を確認した。

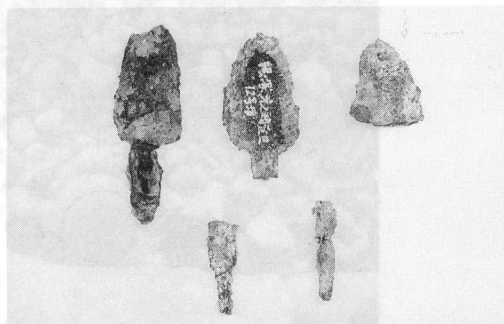
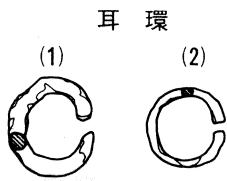
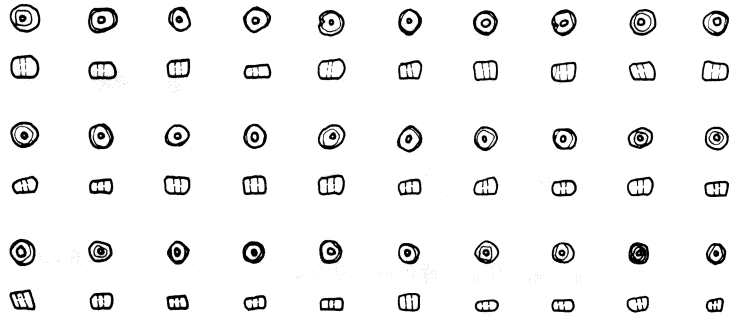


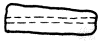
写真28 12号墳 鉄鏃 (1) (2) (3)



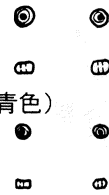
小玉  
(紺青色)



管玉



(緑青色)



鉄錐

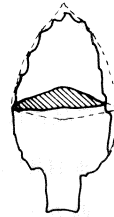


鉄鏃

(1)

(2)

(3)



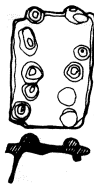
鉄鏃の茎



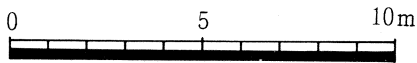
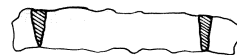
鋳付飾金具

(1)

(2)



刀子



第12図



### 鉄鎌（第13・14・15図）

長さ21cm、幅3.4cm、背の厚さ0.4cm。

刃部の大半と先端部を欠失しているが、残存部から柄が刃部に対して直角に近い角度で付いていた曲刃の鉄鎌と推定する。このほかに、鉄鎌と思われる鉄片4個がある。

### 刀子（第12図）

長さ5.9cm、幅0.9cm、背の厚さ0.4cm。

両端とも欠失している。

### 有蓋埴（第16図）

玄室内の中ほどの東寄り（被葬者の腹部）の地点から埴に蓋をした状態で検出した。内部には粘土が充満し、内壁には柿の根毛が密着していた。

蓋をした状態での高さは9.4cmである。

蓋は高さ3.4cm、直径9.6cmでつまみを伴わず、口縁端部は丸味があり、頂部はヘラ削り調整を施している。

埴は器高7.8cm、口径部の高さ1.4cm、口径6.9cm、器体部最大径12.5cmである。頸部は短く直立し、口縁端部は丸く仕上げられている。体部は肩に張りがあり、幅0.2cm程の沈線が認められる。底は丸く仕上げ、体部の下半分にはヘラ削りが認められる。

### 埴蓋（第17図）

口径13.6cm、高さ3.8cm、深さ3.3cm。

天井部と口縁部の境界に僅かに浅い沈線が認められ、天井から口縁部にかけて回転ヘラ削り調整により丸くなだらかなカーブを描いている。口縁端部は丸く仕上げている。

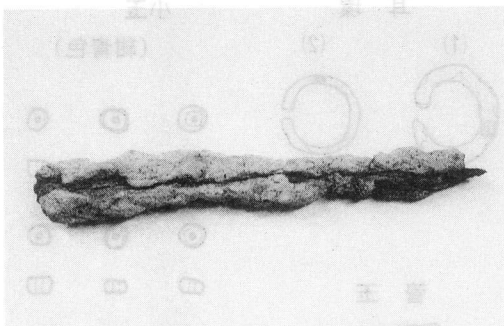


写真29 12号墳 鉄鎌

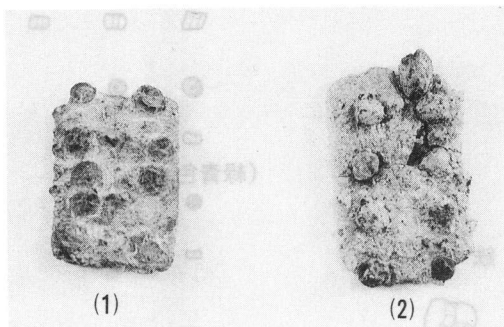


写真30 12号墳 鋳付飾金具

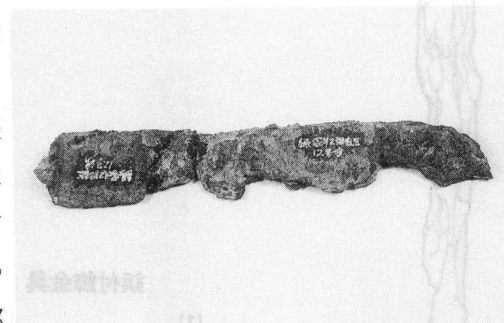


写真31 12号墳 鉄鎌 (1)



写真32 12号墳 鉄鎌 (2)

坏 (第17図)

口径15.5cm。高さ4.4cm、深さ3.8cm。

たちあがり短く、内傾し、底部は丸く、外面の3分の2程度は回転ヘラ削り調整がみられ、内面は回転ナデ調整が施されている。

高坏 (第18図)

器高20.5cm、口径18cm、深さ4cm、脚部の高さ16cm、脚部の底面の径16.2cmの有蓋高坏で、坏部に坏身の形状をそのまま転嫁させ、さらに、基部が細く、外反する長い脚を付けた形状である。脚部には底面から2cmと9cm上位にそれぞれ2条の沈線を廻らし、坏の底面と中央の沈線の間及び中央の沈線と下方の沈線の上に直列3方向に透かし窓が刻まれている。

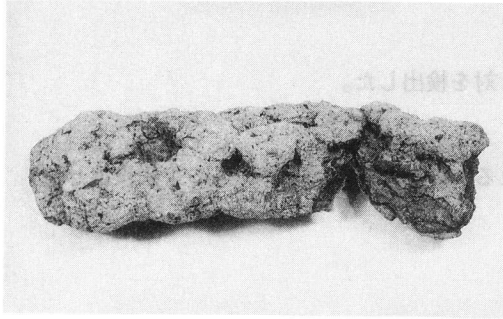


写真33 12号墳 鉄 鎌 (3)

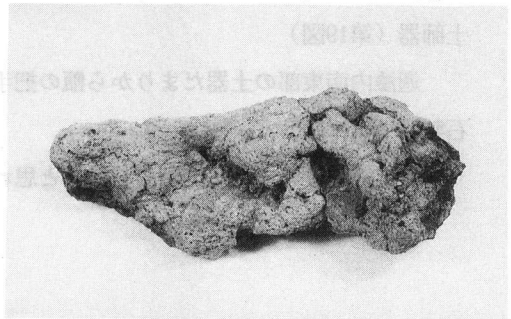


写真34 12号墳 鉄 鎌 (4)



写真35 12号墳 鉄 鎌 (5)

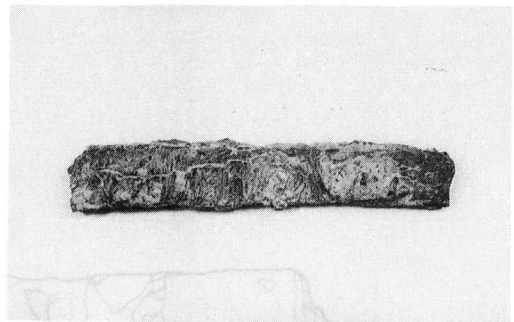


写真36 12号墳 刀 子

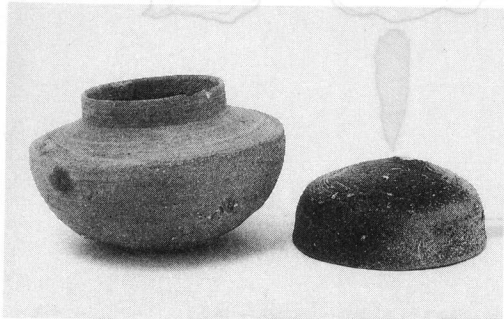


写真37 有 蓋 埴

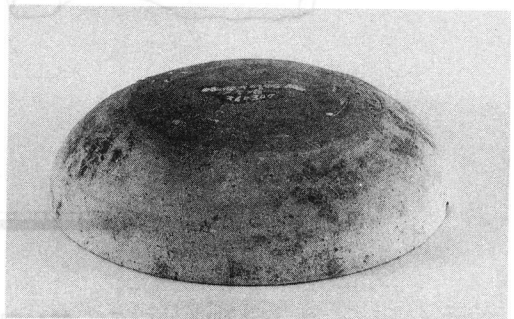


写真38 坏 蓋



写真39 坏



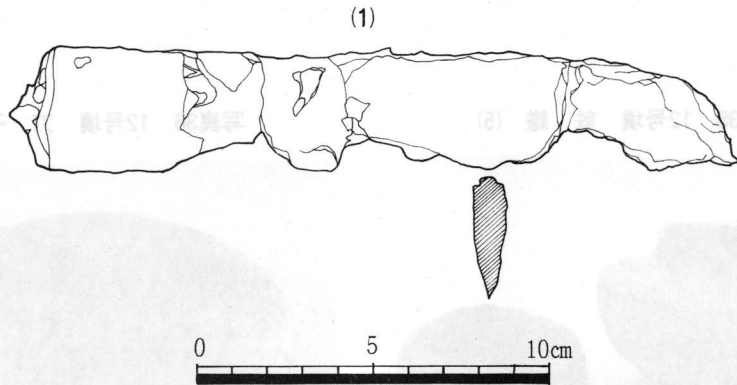
写真40 高坏

土師器 (第19図)

週濠内南東部の土器だまりから甑の把手1対を検出した。

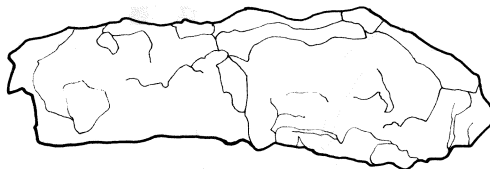
石製品 (第19図)

表土剥離中サヌカイト製の石包丁と思われるもの1個、用途不詳のもの1個検出した。



第13図 鉄鎌

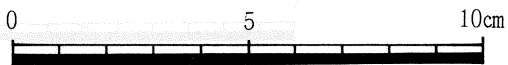
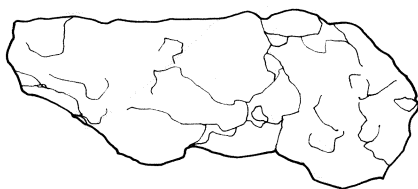
(2)



(3)

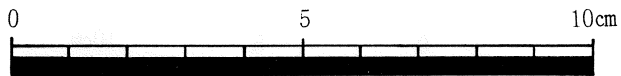
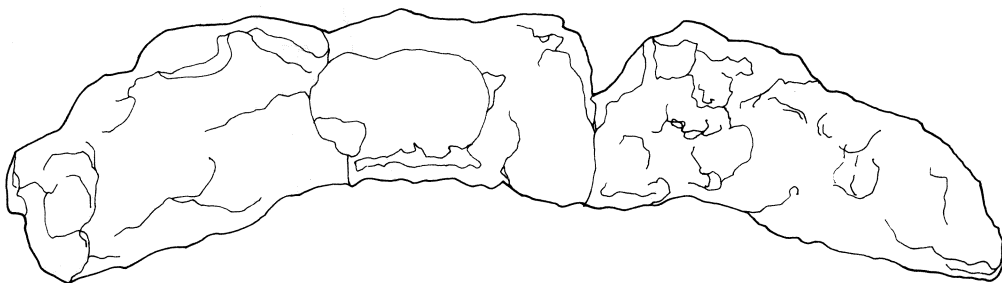
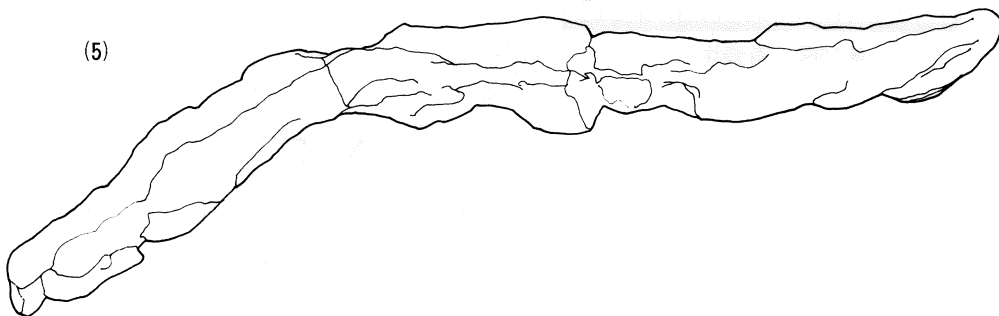


(4)

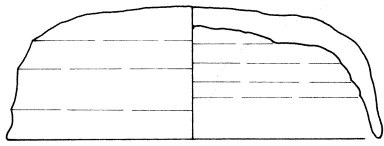


第14図 鉄 鎌

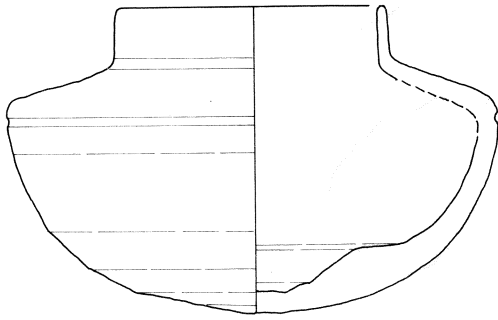
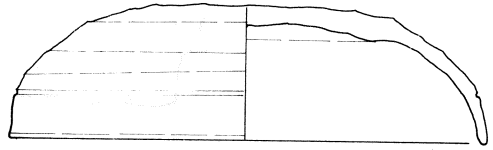
(5)



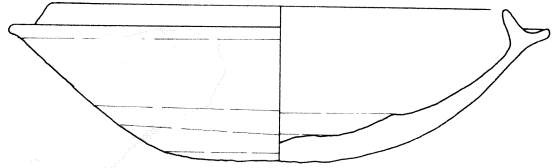
第15図 鉄 鎌



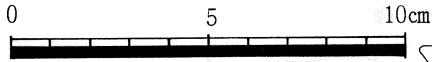
坏 盖



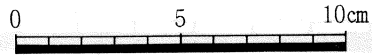
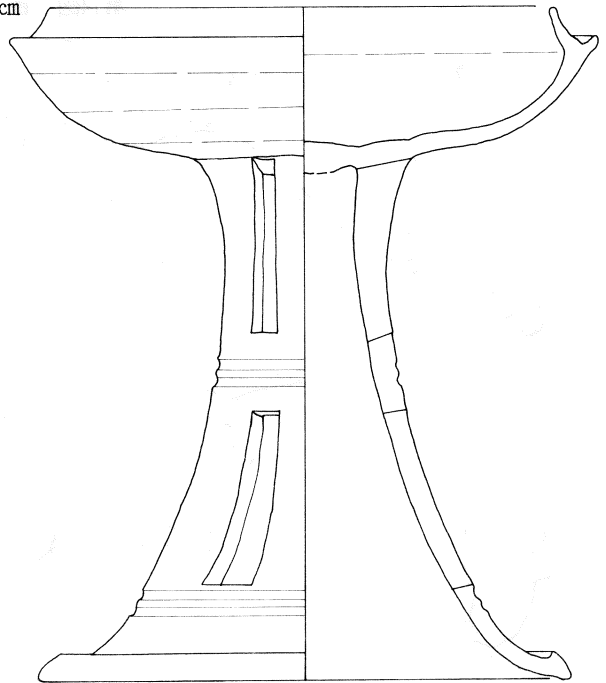
坏



第17图



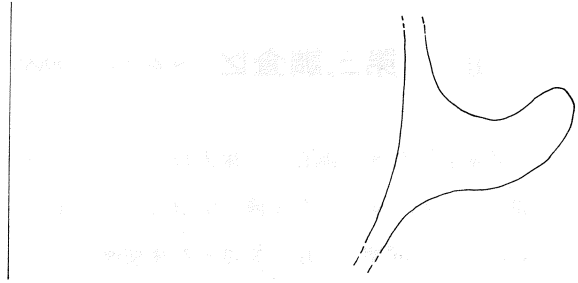
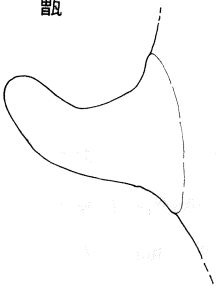
第16图 有盖坩



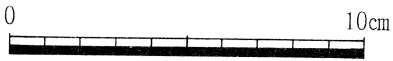
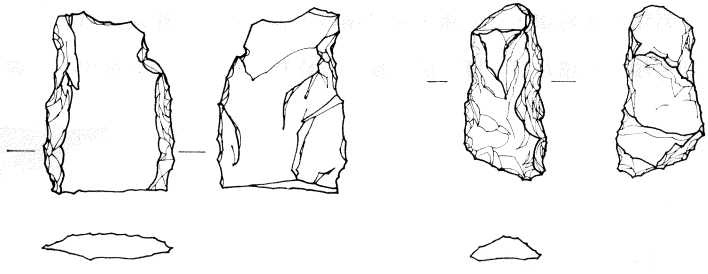
第18图 高 坏

土師器

甑



石製品



第19図

## [ II ] 第三調査区 (第20・21・30図)

本調査区は第二調査区の東方120m、谷一つ隔てた丘陵で、南方がやや高く (65.27m)、北へ進むにつれて緩やかな下降 (63.92m) する概して平坦な地形である。この丘陵も昭和の初期と終戦直後に開墾し、削平整地され果樹園となり、56平方メートルほどの灌漑用水池も掘削されている。掘削した土は凹地に埋土して整地し、施肥溝を全面にわたり掘り、遺構は相当に破壊されている。

本調査区には、1号墳・2号墳・3号墳・4号墳の古墳があると推定されていたが、さらに、13号墳、14号墳、15号墳の古墳及び1間3間の掘立柱建物1棟の柱穴を検出し、調査した。

(21図・30図(1)・30図(2)参照)



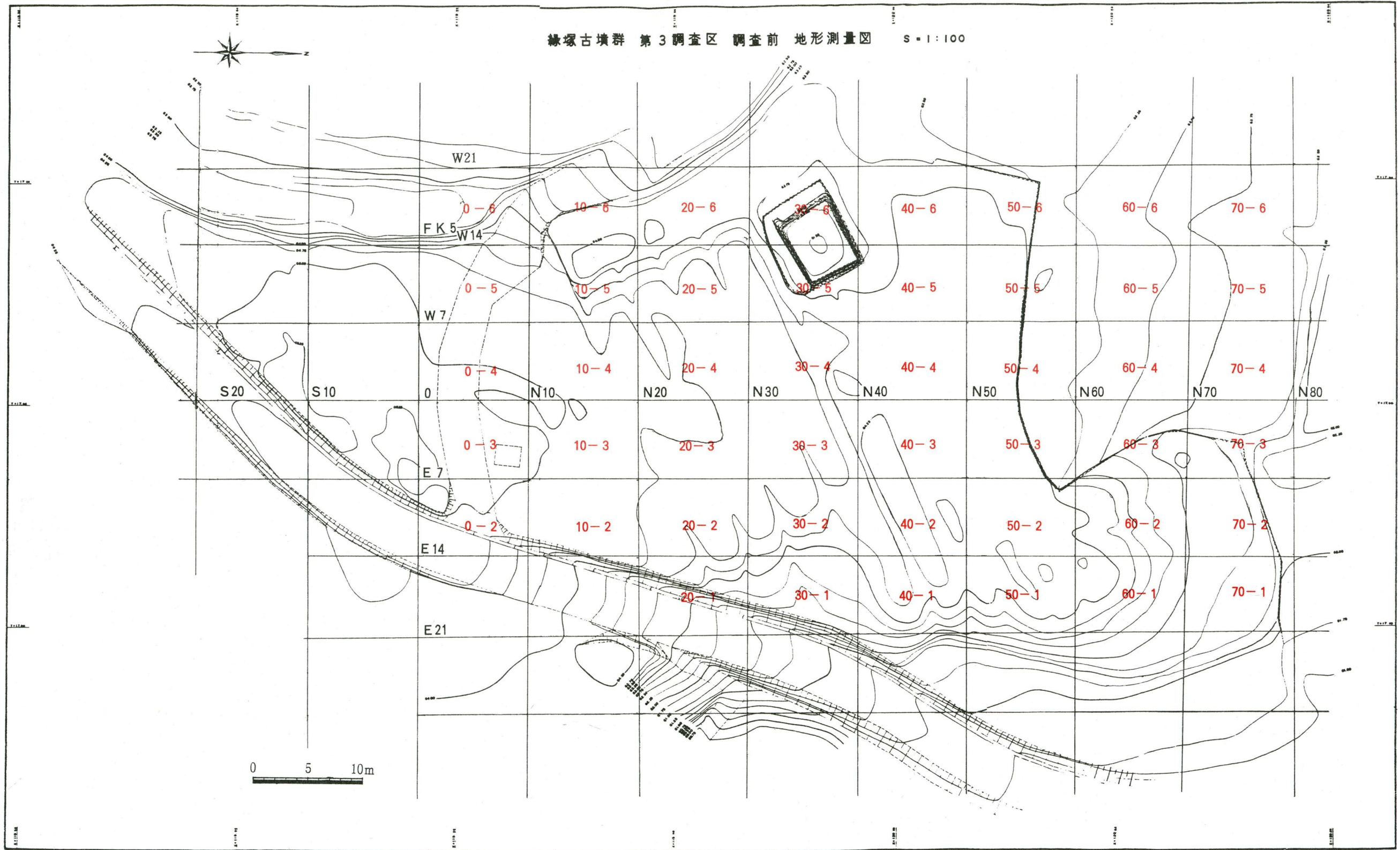
写真41 第3調査区全景



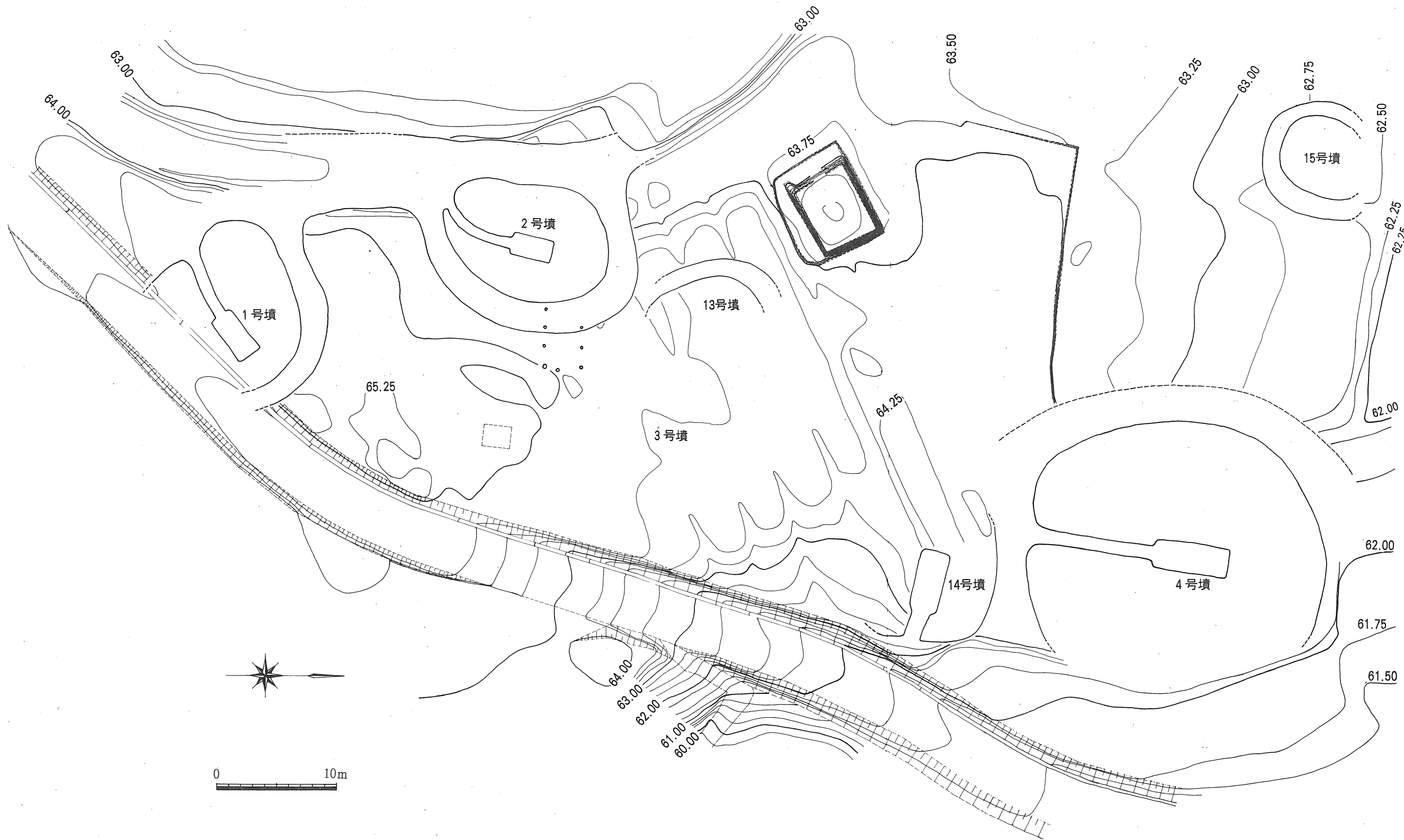
写真56 柱穴1間3間



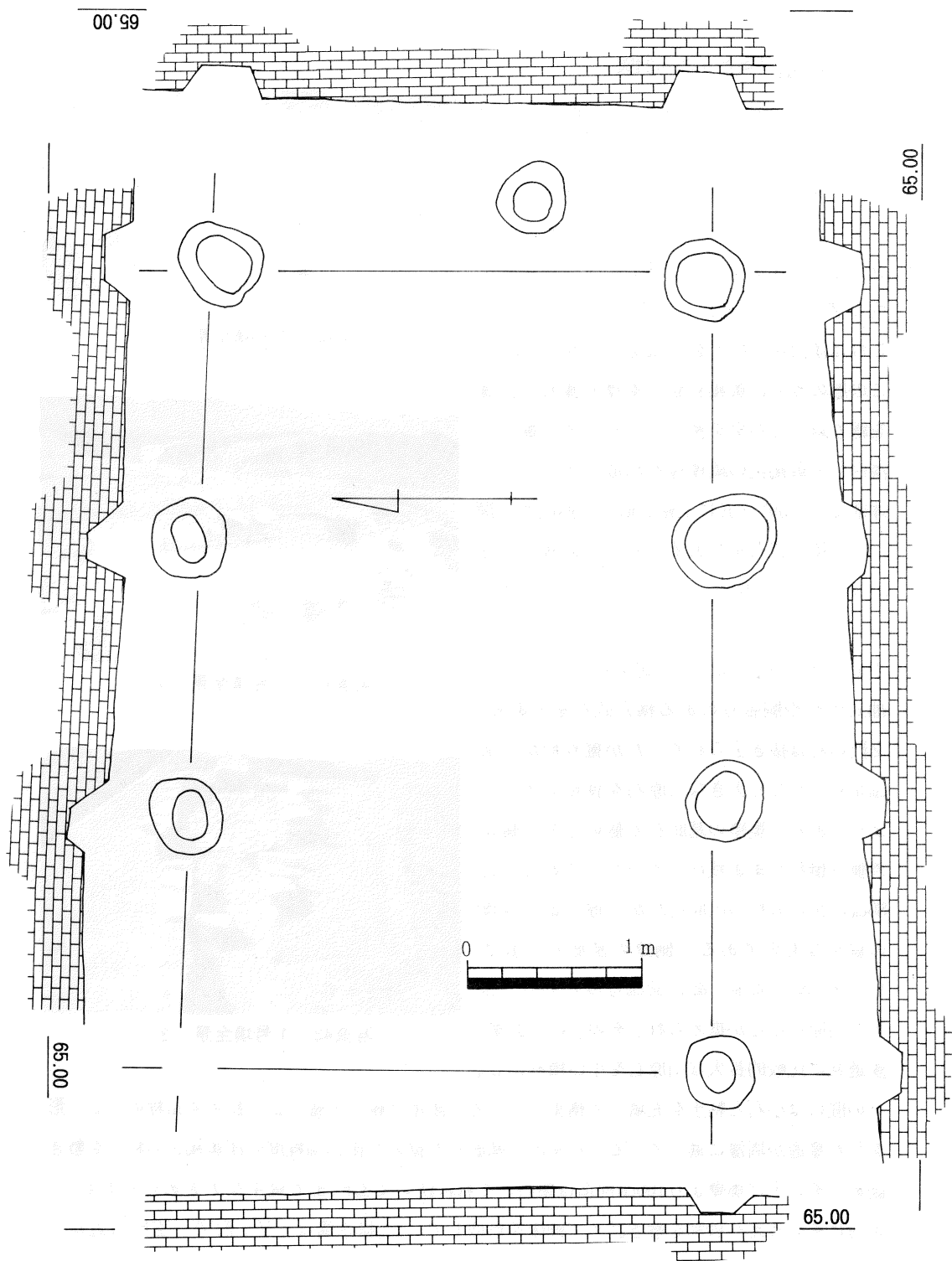
縁塚古墳群 第3調査区 調査前 地形測量図 S=1:100



第20図 第3調査区全図・全景（調査前）



第21图 第3調査区古墳配置图



第30图 (1) 掘立建物実測图

(1) 1号墳(第22・23・24図)

本調査区の南端(65.27m)に位置している。北東部は道路に接し、完全に破壊されている。存する周濠から推考し、直径16m程度の円墳と思われる。僅かに残存する封土の断面を調査すると、厚さ18cm程の封土に淡白色と黄褐色の層が交互に密着して12~13層に達する。これは淡白色の粘土を1.5cm余りの厚さに塗り、この層のうゑに黄褐色粘土を塗り重ねる作業を繰り返して石室を密封したもので、断面が淡白色と黄褐色の縞模様を形成していた。主体部はN-59°-Eに主軸を取り、西南西に開口する横穴式石室である。石室の規模は玄室の長さ3.62m、奥壁の幅2.04m、玄門部幅1.62m、最大幅2.12m、羨道の玄門部の幅0.85m、羨道入り口の幅0.92m、羨道の長さ2.80mで両袖式のやや胴張りのある横穴式石室である。玄門の石は抜き去られていたが掘り形から50cm余りのかなり大きな川原石を使用していたようである。奥壁の基底石4個のうち1個が外側へ倒れたまま残存していた。これは一辺80cmに余る大形の川原石だが、厚さ20cm程度の扁平なものである。側壁の基底石は長さ1.20m、厚さ30cm、高さ58cm程度といった長大な川原石などが据えられ、その上に、玄室、羨道共に比較的長大な川原石を小口積みにし、その間には小石と粘土を充填して構築している。羨道に続いて幅1m、長さ4m程の「J」形をした墓道が周濠に通じている。石室内は基底石を据えた後10cm程度の淡黄褐色の粘土を敷き詰め、その上に奥壁より100cm程迄は栗石、それに続いて玄門まで扁平な大きめの石を並べ、さらにそのうゑへ砂利を敷き詰めて礫床を形成していた。排水溝は「V」形で、玄門付近から羨道、墓道にかけて中央に真直に掘られていた。

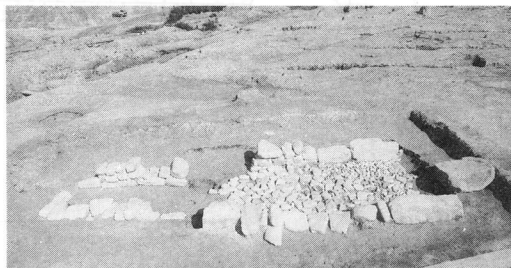


写真42 1号墳全景 1

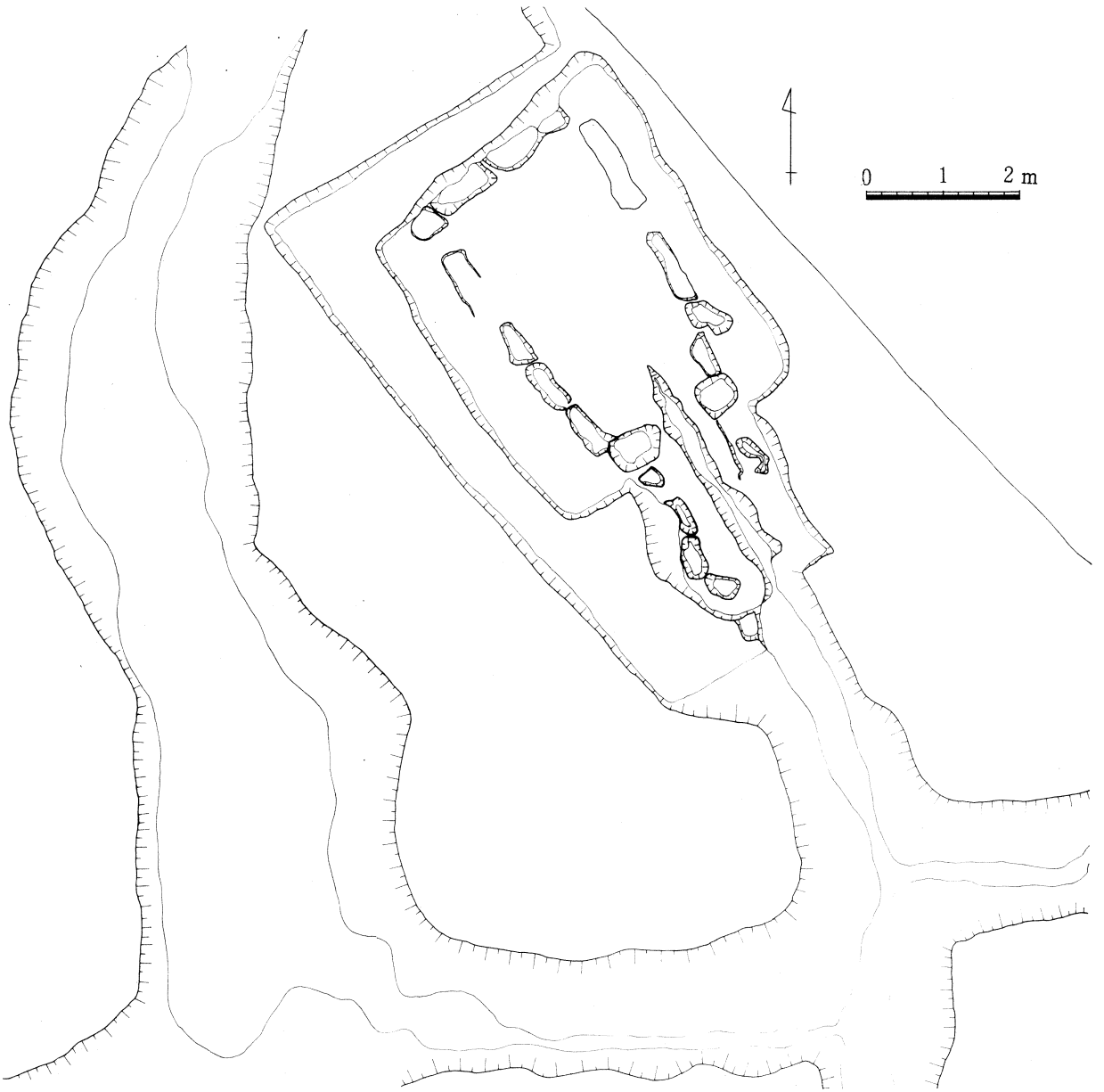


写真43 1号墳全景 2

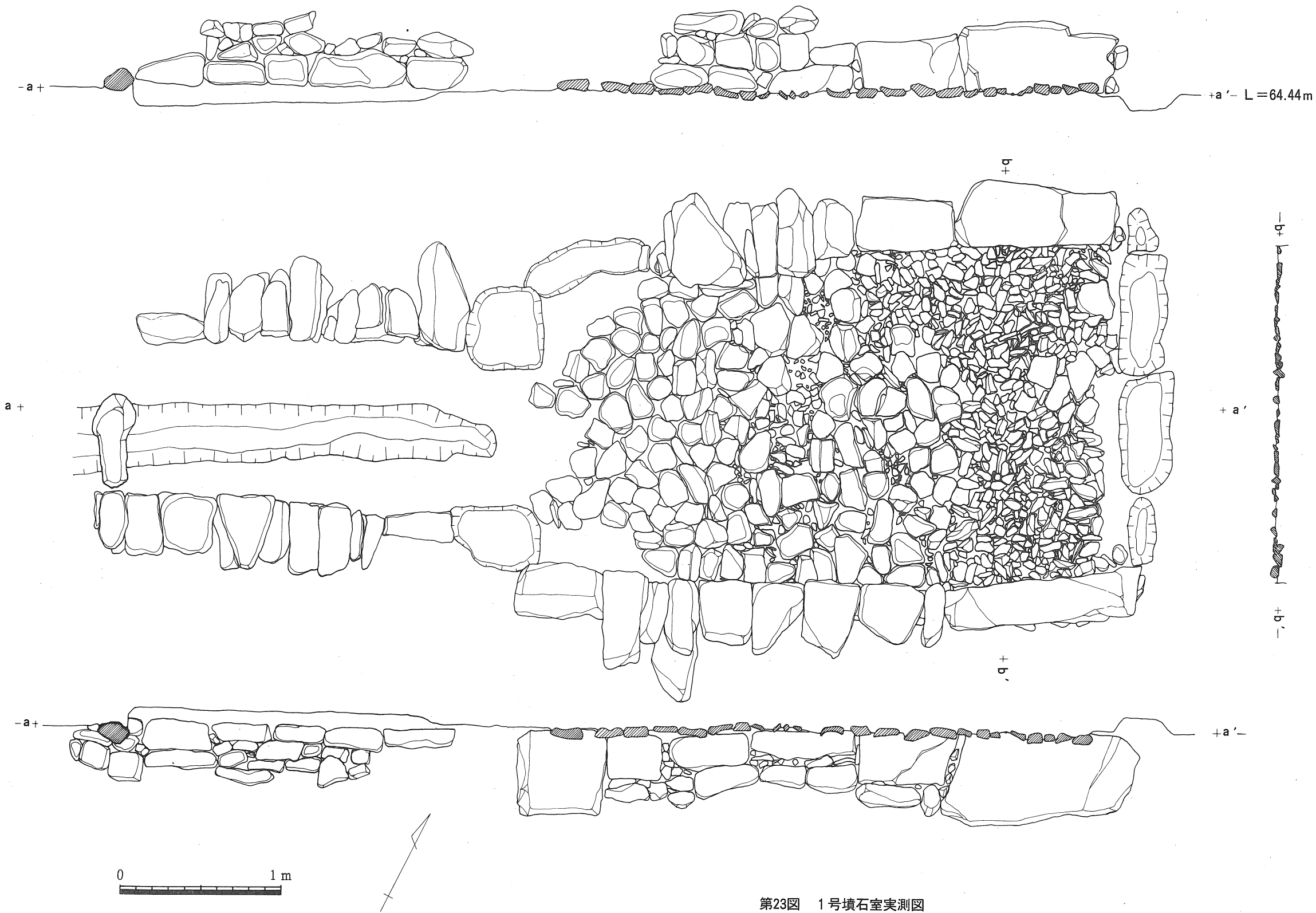


写真43 1号墳全景 3

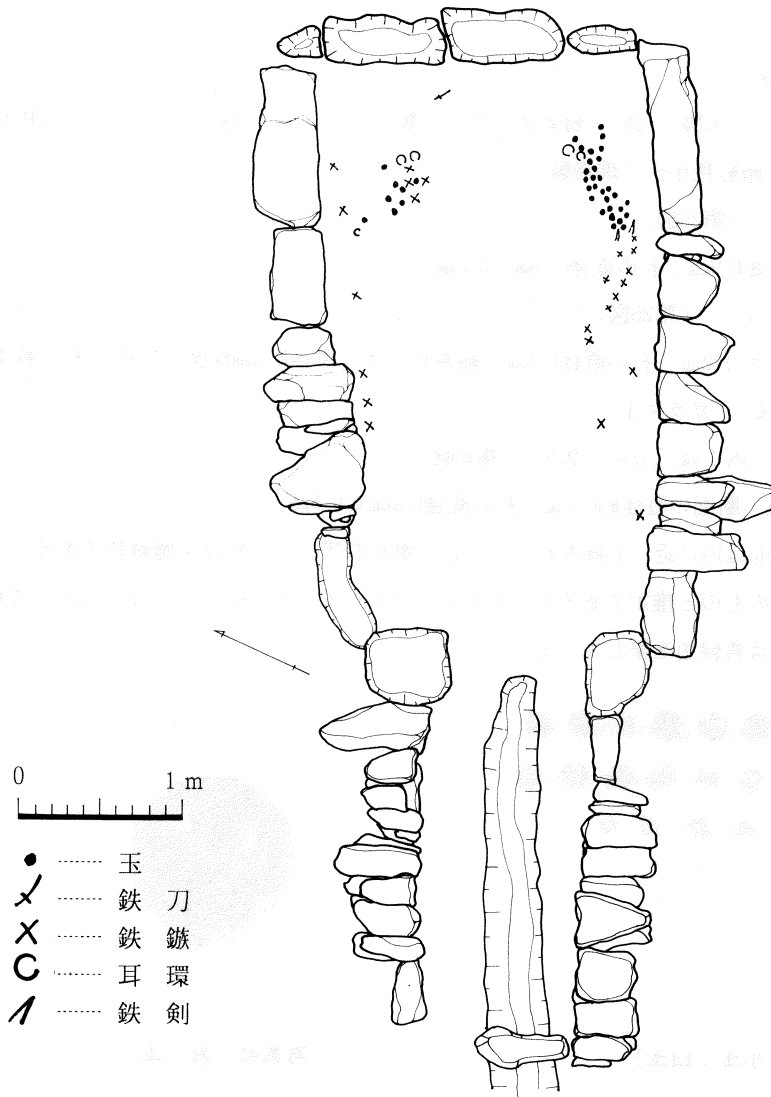




第22図 1号墳実測図



第23图 1号填石室实测图



第24図 1号墳遺物出土状況図

## 出土品について

### 小玉 33 (第25図)

紺青色小玉(ガラス製)(28)、緑青色(ガラス製)小玉(2)、緑色小玉(1)、白色小玉(水晶製)(1)、暗紅色小玉(瑪瑙製)(1)

### 丸玉(瑪瑙製)1 (第25図)

直径1.2cm、高さ0.9cm、孔の直径0.3mm, 0.2mm。

### 蜻蛉玉(ガラス製)1 (第25図)

直径1.2cm、高さ1.2cm、孔の直径0.3mm。紺青色の玉に直径0.3mm程度の白色の丸い紋を三方向に付している。(ガラス玉)

### 勾玉(翡翠製)2 (内1は二分の一欠失)(第25図)

(1) 長さ2.1cm、断面の直径約0.7cm、孔の直径0.2cmと0.3cm。

完形品で断面は円に近い丸味を形成し、よく磨かれていて、色は灰暗緑色である。

(2) (1)と同形のものと推定できるが、先半分が欠失している。孔の付近は(1)に比して扁平である。色は青緑色を呈している。

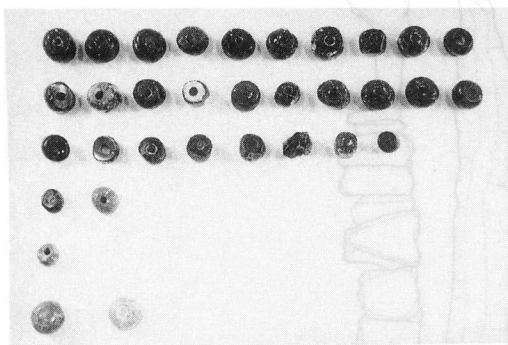


写真44 小玉(白玉)

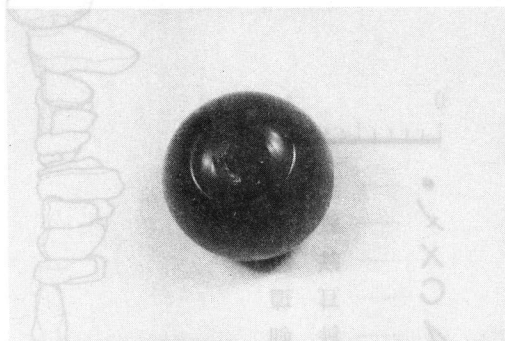


写真45 丸玉

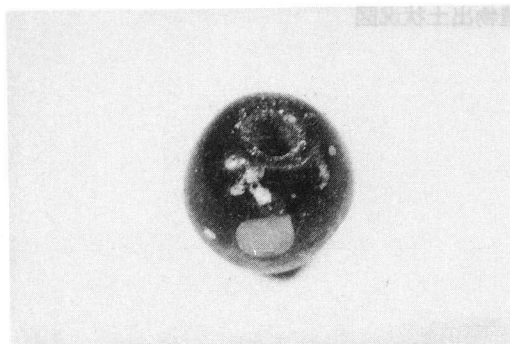


写真46 蜻蛉玉

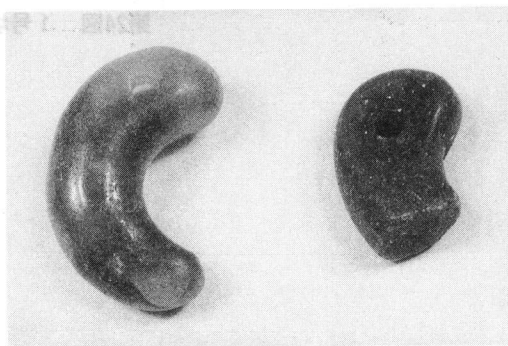
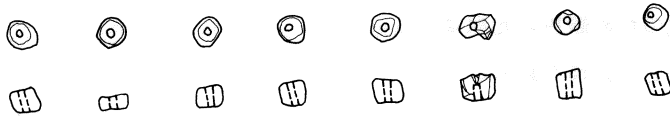
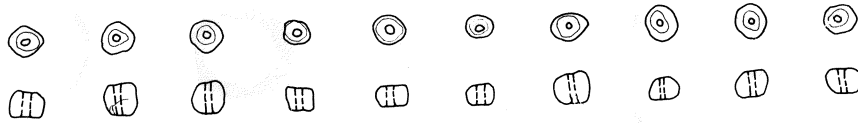
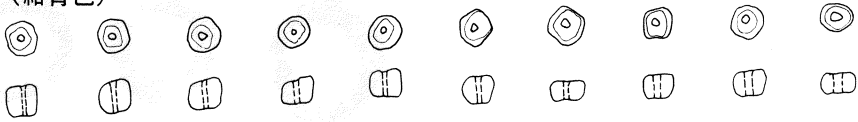


写真47 勾玉 (1)(2)

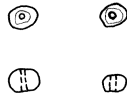


小 玉

(紺青色)



(緑青色)



(緑色)



(暗紅色)



(白色)



勾 玉



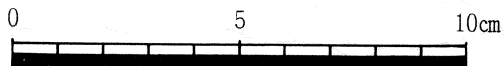
蜻蛉玉



丸 玉



(2)



第25図

耳環 5 (内1は三分の二欠失)(銀環)  
(第26図)

- (1) 外径2.7cm 断面の直径0.5cm
- (2) 外径2.7cm 断面の直径0.5cm
- (3) 外径3.0cm 断面の直径0.6cm
- (4) 外径2.2cm 断面の直径0.3cm
- (5) 外径2.3cm (推定) 断面の直径0.2cm

(2)・(3)は残存する銀薄板の光沢を確認できるが、他は酸化のため銀色の光沢は認められない。しかし、銅環を銀薄板で包んだ状況が確認できる。

玉類、耳環、は奥壁より45cm~120cmの範囲で中心線の両側の側壁に近い地点で検出した。

鉄刀 (第27図)

長さ31.1cm、幅3cm。奥壁中央の15cm程手前で検出した。一部欠失しているが中心(ナカシン)部に目釘穴と思われる3.8mm角の孔が1個ある。

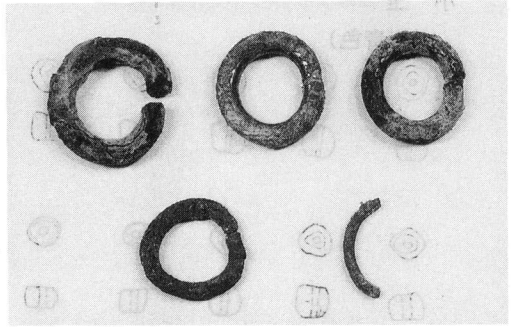


写真48 耳環(1~5)

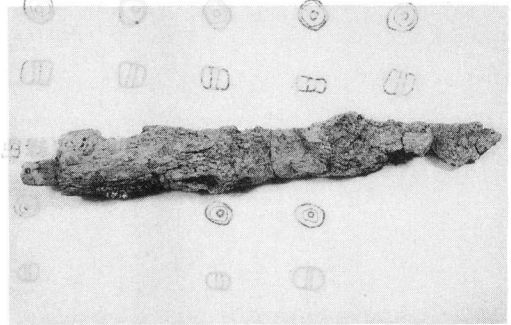
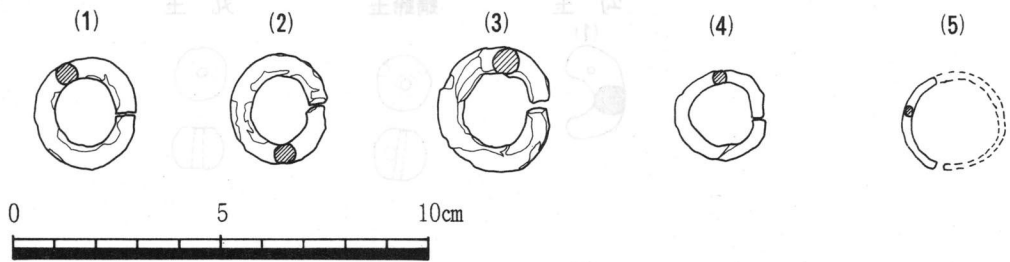


写真49 鉄刀



第26図 耳環



第27図 鉄刀

鉄剣片 2 (第28図)

(1) 長さ9.7cm、幅3cm、厚さ0.3cm

(2) 長さ6.4cm、幅2.3cm、厚さ1.3cm

(1)と(2)が同一固体であるか確認できないが、奥壁より1.2m程手前の側壁際で検出した。

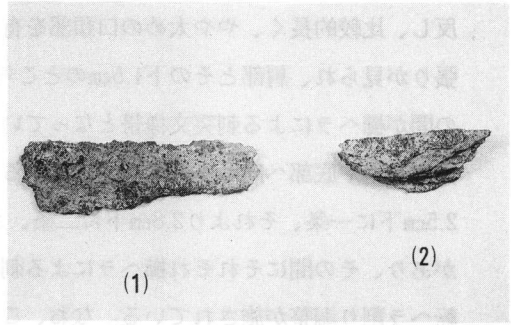


写真50 鉄剣片

刀子 2 (第28図)

(1) 長さ4.6cm、幅1cm、背の厚さ0.4cm、

断面は楔形をなし、両端は欠失している。(2) 長さ10.6cm、背の厚さ0.4cm。刃部は先端が欠失しており、断面は楔形を呈している。柄部は長さ約6cmあり、断面は長方形をしている。

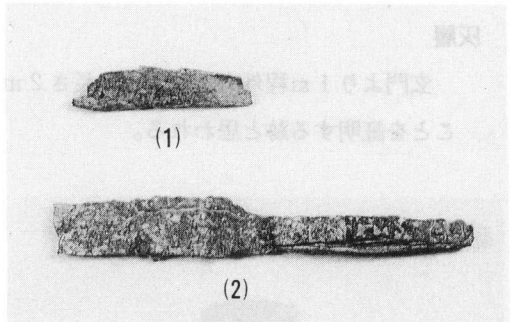


写真51 刀子

鉄鏃 5 (第28図)

玄室内の半分から奥の側壁に近い地点より検出した。有茎三角式・柳葉式のものがあるが、茎部が途中で欠失したものが多い。(1), (2)の茎に布目痕・木質痕が検出された。このほかに茎部を多数検出した。



写真52

短頸壺蓋 (第29図)

器高3.1cm、直径7cm、立ち上がりの径4.5cm。つまみは直径2.5cm、高さ0.4cmと低く、扁平で基部の径は2.1cmと大きいものである。天井は丸味があり、回転ハケナデ調整され、縁辺部より1cm程のところ幅0.1cm程の浅い沈線がある。立ち上がりはオリコミ手法により、比較的高く、わずかに内傾している。

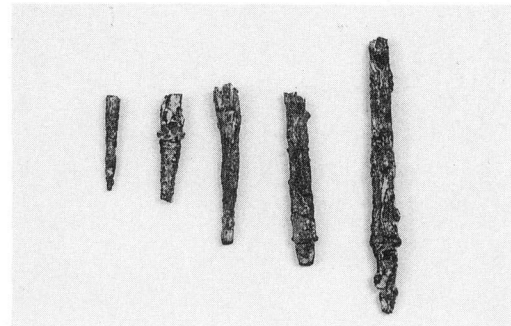


写真53 鉄鏃茎

甕 (第29図)

器高19.7cm、口径16.0cm、頸基部径4.6cm、体部径10.3cm、体部高6.9cm。ラップ状に外

反し、比較的長く、やや太めの口頸部を有し、体部はやや球体状を呈しているものの、肩に張りが見られ、肩部とその下1.5cmのところ、幅0.3cm程度の沈線がそれぞれ一条あり、その間が櫛へらによる刺突文様帯となっている。この文様帯上に径1.4cm程の円孔が外方から内方へやや底部へ向かって穿孔されている。口頸部は口縁端部が段をなしており、口縁より2.5cm下に一条、それより2.8cm下に二条、さらに、その下に1.7cm程下のところに一条の沈線があり、その間にそれぞれ櫛へらによる刺突文様帯を施している。体底部の二分の一程は回転へら削り調整が施されている。なお、この器は羨道のすぐ外の中央部に横倒し状態で検出した。

#### 灰層

玄門より1m程外方に幅1m、長さ2m程の灰層を検出した。これは墓前祭祀の行われたことを証明する跡と思われる。

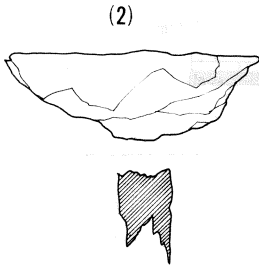
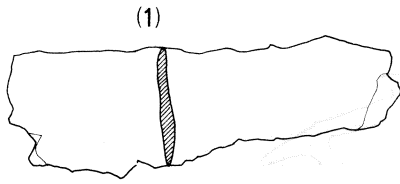


写真54 短頸壺蓋

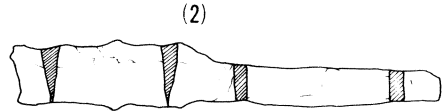
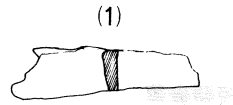


写真55 壺

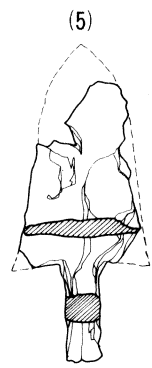
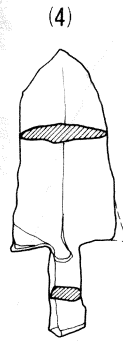
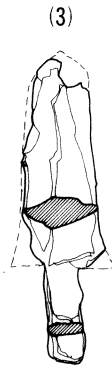
鉄剣片



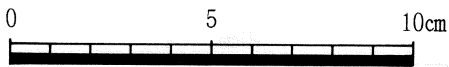
刀子



鉄鋤



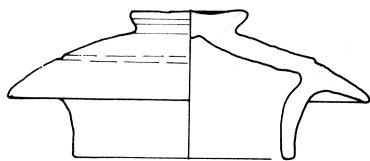
鉄鋤茎



第28図



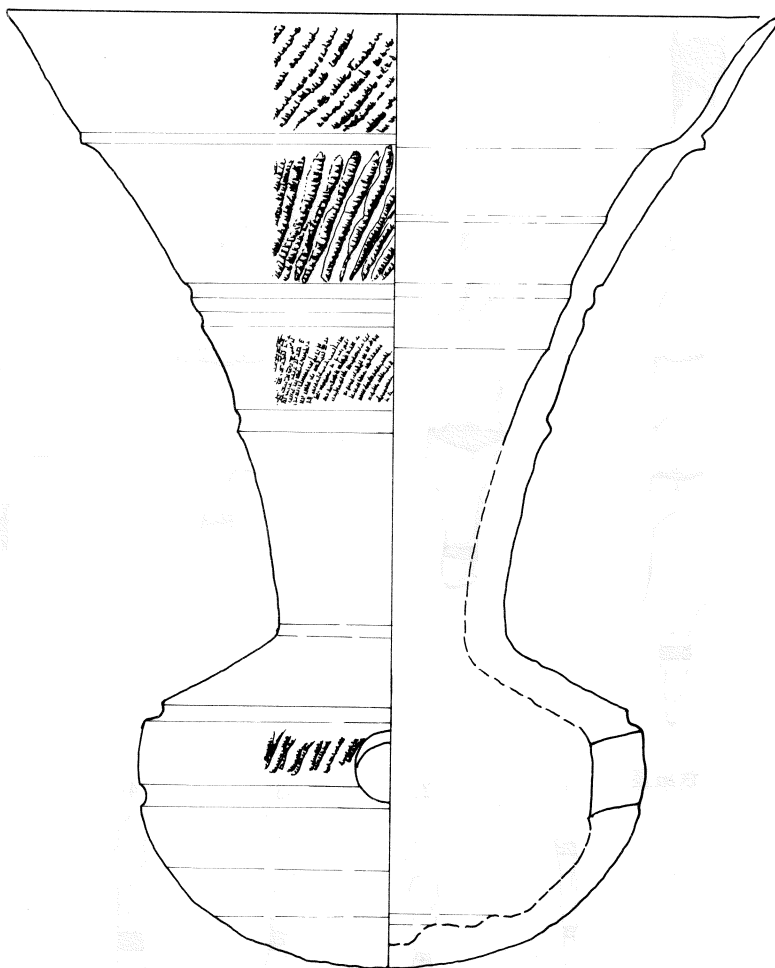
短頸壺蓋



0 5 10cm



壺



0 5 10cm



第29図

## (2) 2号墳 (第31図)

2号墳は1号墳の北北西方向約25mの地点にあり、1号墳より約0.5m程低い処に位置している。ここも削平され、さらに果樹の植え穴、施肥溝の掘削などにより、かなり破壊されている。僅かに残存する周濠などから推考し、直径12m程度の円墳と思われる。

主体部はN-12°-Eに主軸をとり、南南西に開口する横穴式石である。

基底石は1部抜き取られているが、石室の長さ4.6m、奥壁幅1.7m、玄門付近の幅1.45m、羨道の長さ1.6m、玄門幅1.05m、羨門幅0.84、と割合羨道幅の広い両袖式の横穴式石室である。

開墾後、玄室のほぼ中央部に肥え溜め壺を設置したらしく、地山に達する掘削跡があり、その破片が認められた。玄室、羨道とも、基底石には長大なものを据え、その上に長手の川原石を小口積みにし、その間に小石、粘土を詰めて構築している。なお、奥壁と側壁の隅は丸味をもった積み方をしている。

床面は基底石を据え、黄赤褐色の粘土を敷き詰めた後、幅約20cm、深さ12~3cmの「V」字形の排水溝を玄室の中央より羨道中央を真直に掘られている。また、排水溝は扁平な川原石を並べて蓋をしている。粘土を敷き詰めた床には、奥壁近くには扁平な大きめの石、中央より玄門までは小型の扁平、または、長めの石を敷き詰め、その上に砂礫を敷き詰めて構築している。尚、玄門には敷き石とは別に長手の仕切石を据えてあった。

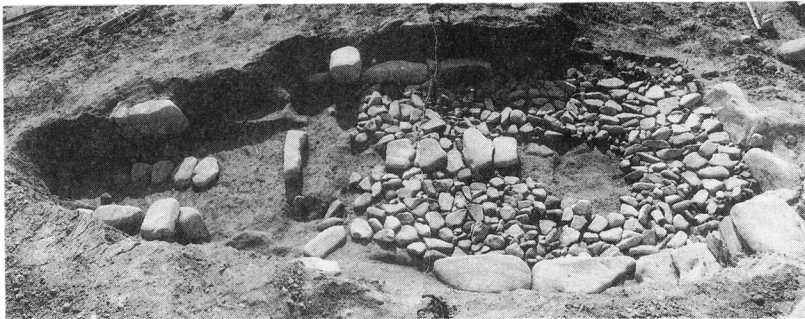


写真57 2号墳

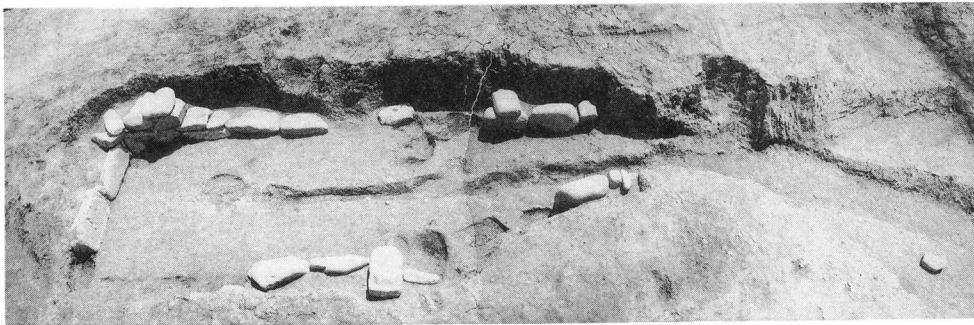
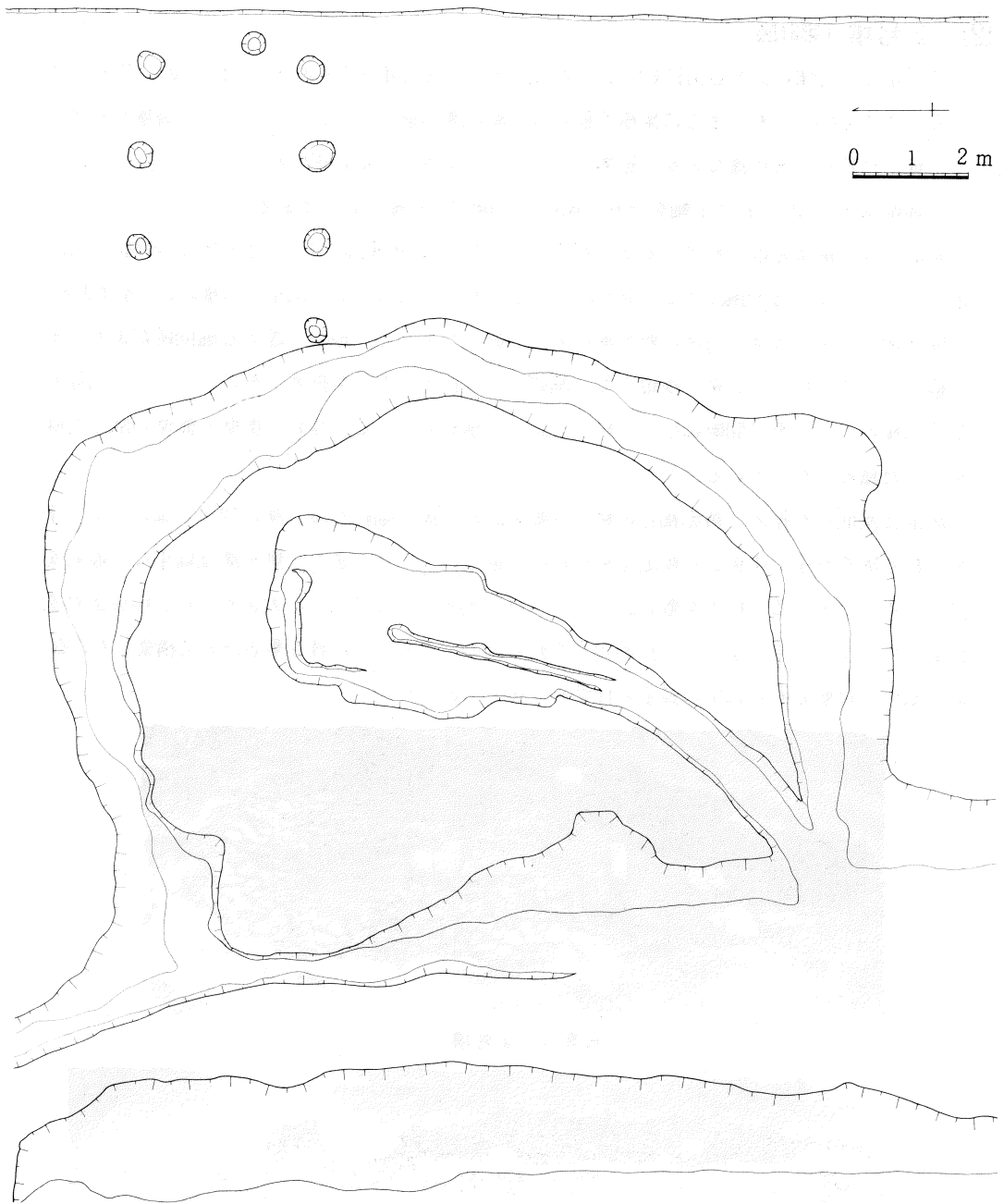
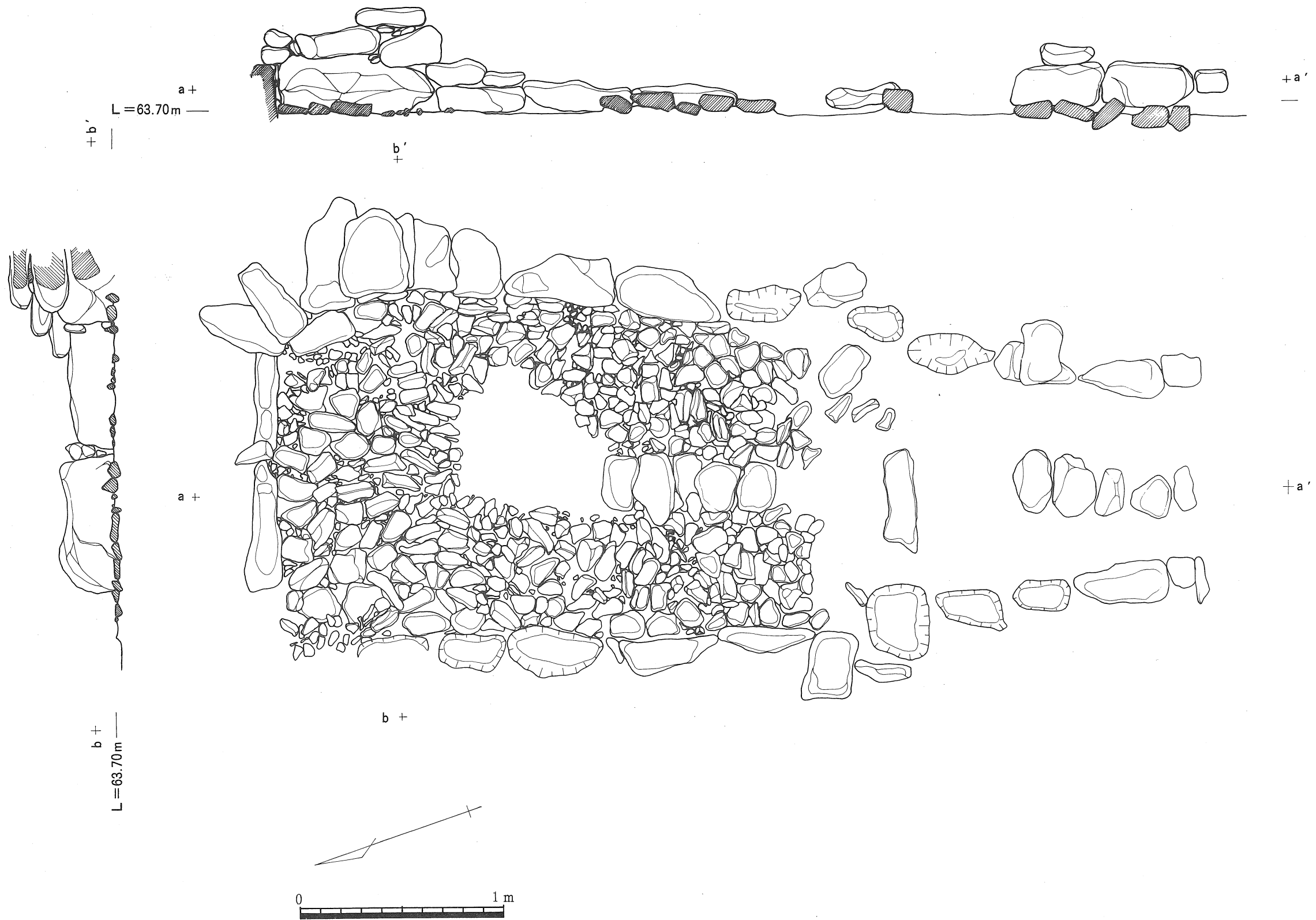


写真58 2号墳

図解実地調査記録 第31 (5) 図06



第30图 (2) 2号墳・堀立建物址実測図



第31图 2号墳石室実測図

## 出土品について

### 鉄刀 1 (第32図)

玄室の北東の隅、基底石の近くより検出した。長さ23.3cm、刃部は20cm程度、幅3.2cm、背の厚さ0.6cmである。

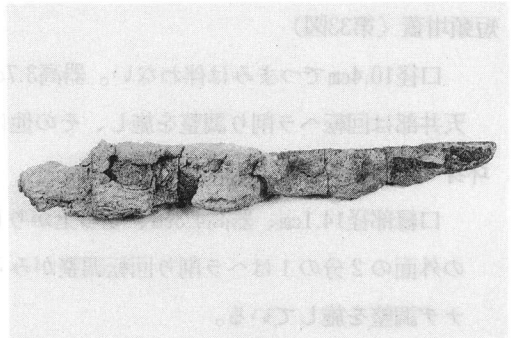


写真59 鉄刀

### 鉄鍬 2 (第33図)

- (1) 茎の部分で長さ4.5cmで断面は概ね長方形である。
- (2) 先端部分のみで、厚さ0.2cm程である。

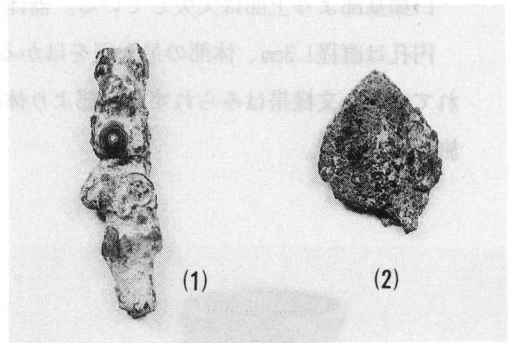


写真60 鉄鍬

### 甕 (第33図)

口頸部と器体のごく一部だけである。口頸部の高さ6.5cm、口縁部の径12.3cm、口頸基部7.5cmで器形はやや小型。緩やかに外反する口頸部はその端部でわずかに肥厚し断面は方形を呈する。

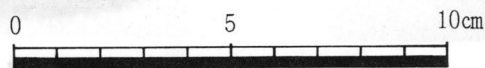
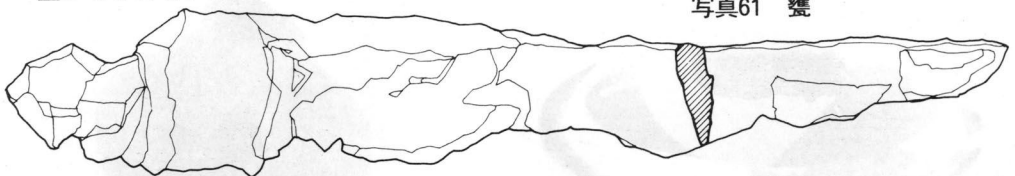
### 短頸壺 (第34図)

頸部は、高さ2.5cmと短く、口縁部11.5cm、わずかに外反するも先端部は直立気味に伸び、上部に一条の沈線を有する。端部は平らで内側に稜をもつ。

体部の径は22cmで肩は緩やかで張りがあり、上部に細・太各々一本の浅い沈線をともなう。底部は丸底で下半分はヘラ削り調整がなされている。



写真61 甕



第32図 鉄刀



短頸埴蓋（第33図）

口径10.4cmでつまみは伴わない。器高3.7cmで口縁端部は平面をなし、肩には丸味がある。天井部は回転ヘラ削り調整を施し、その他はユビナデ調整を施している。

坏身（第33図）

口縁部径14.1cm、器高4.3cm、立ち上がりは高さ1cmで、内傾し、その端部は丸い。底部の外面の2分の1はヘラ削り回転調整がみられ、暗緑色の釉薬が付着している。内面はユビナデ調整を施している。

甕（第33図）

口頸基部より上部は欠失している。器体は球形を呈し、最大径は10.1cmである。円孔は直径1.3cm、体部の最大径をはかる部位に外方より内方へ斜め下に向かって穿孔されている。文様帯はみられず、底部より体部の最大径をはかる部位にかけてヘラ削り調整が施されている。



写真62 短頸壺

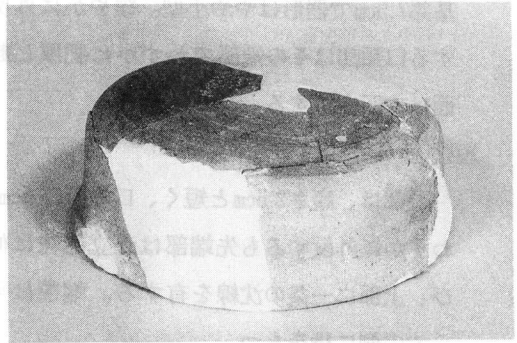


写真63 短頸壺蓋

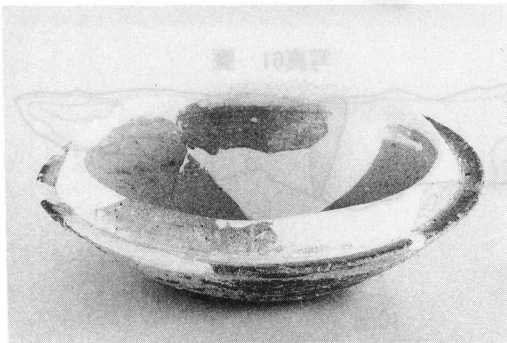


写真64 坏身

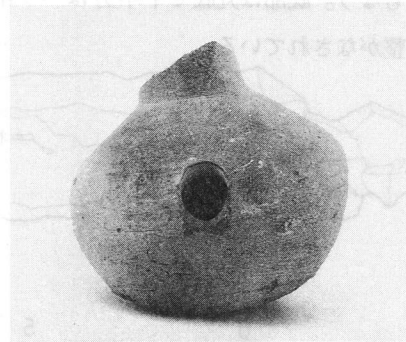
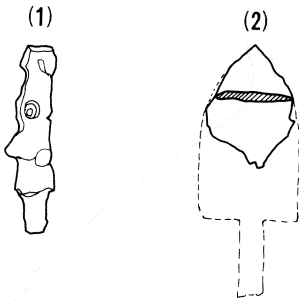
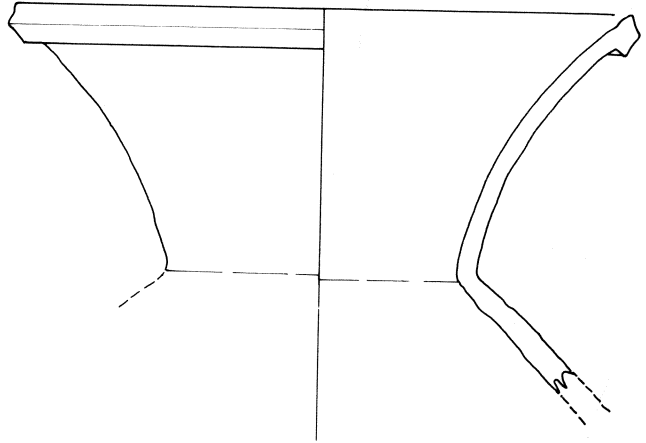


写真65 甕

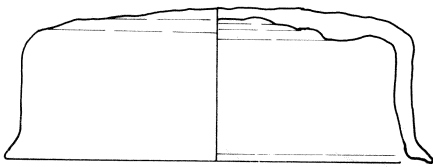
鐵 鍬



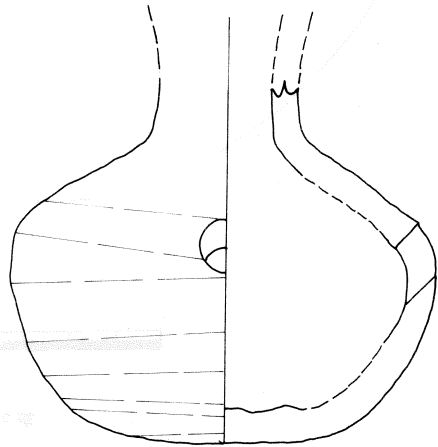
甕



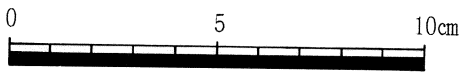
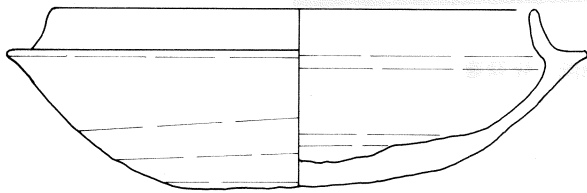
短頸罇蓋



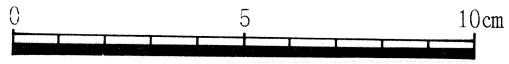
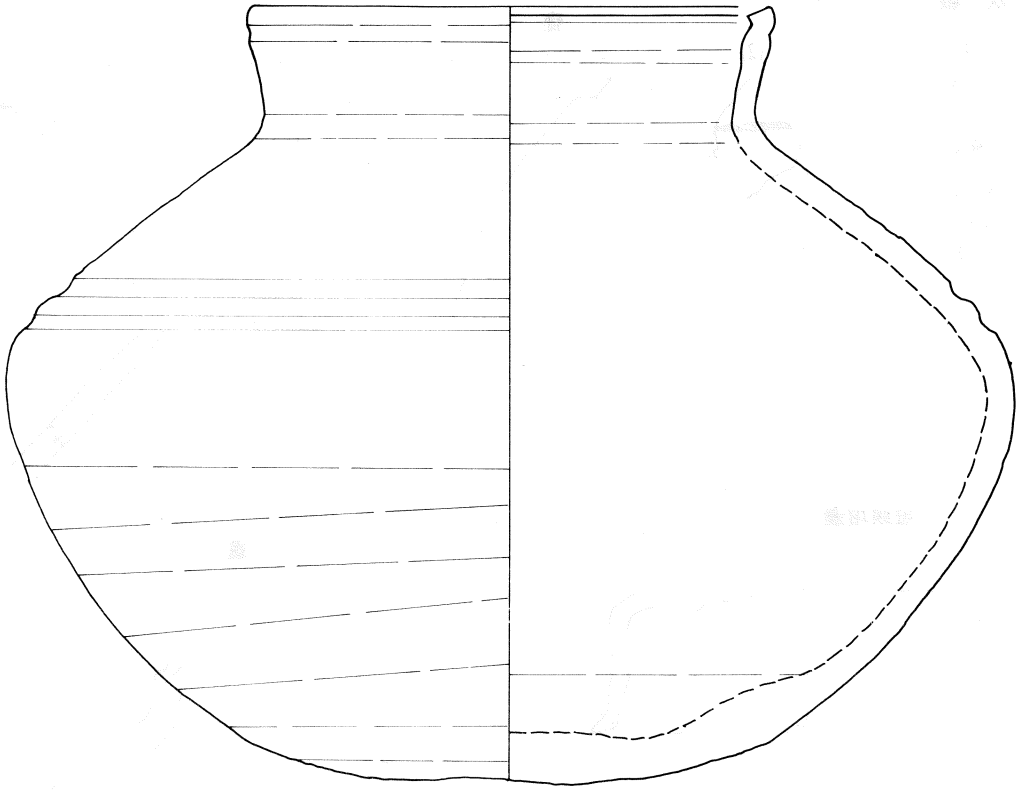
甕



坏 身



第33图



第34図 短頸壺

### (3) 3号墳

標高64.75m、1号墳の北北東35m、2号墳の北東20mに位置している。この地点は削平と施肥溝の掘削りにより破壊著しく、石室の基底石の掘り形も、周濠も遂に検出できず、ただ、攪乱された土に混じって扁平な川原石3個と礫50個程を検出したにすぎない。この地点より東に7mのところ須恵器を検出した。

#### 出土品について

##### 碗 (第35図)

口径10.3cm、器高5.5cm、深さ5cm。広口で、体部は直立し、口縁部で僅かに外反し、口縁端部は丸く仕上げている。また、体部には1条の沈線を施し、底部は丸く、回転ヘラ削り調整を施している。体部の外面及内面全体はユビナデによる調整が施されている。

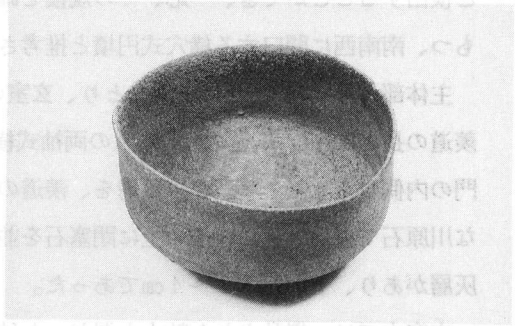


写真66 碗

##### 短頸埴 (第35図)

頸部は0.5cmと極めて短く、直立している。口縁部はごく一部残存するのみで口径の測定は不能である。器高9cm、器体の最大径14.3cm。肩に張りがあり、0.3cmの沈線一条が施されている。器底はやや平らで肩部近くまで回転ヘラ削り調整が施され、肩より上面はナデ調整を施している。有蓋短頸埴と推考される。

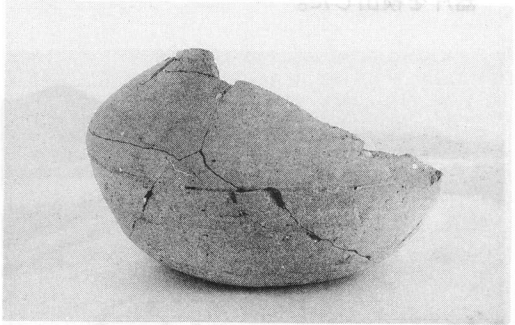
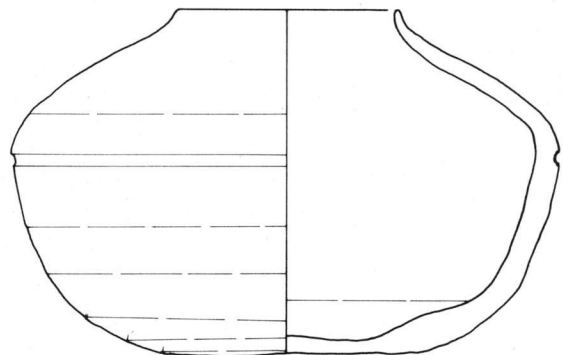
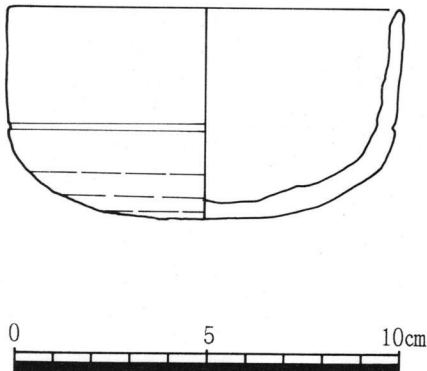


写真67 短頸埴

碗

短頸埴



第35図

#### (4) 4号墳 (第36・37図)

標高64.25m、1号墳の北北東約80mの地点にあり、1号墳、3号墳、4号墳はほぼ1直線に、等間隔に位置している。4号墳も著しく破壊され、基底石は玄室の南隅に川原石3個、羨道東壁に川原石5個残存するのみである。しかし、玄室、羨道ともに基底石の掘り形はほとんど検出することができ、一応、その規模を確認することができた。即ち、直径28m程の周濠をもつ、南南西に開口する横穴式円墳と推考される。

主体部はN-19°-Eに主軸をとり、玄室の長さ6.2m、奥壁は幅2.8m、玄門付近の幅2.2m、羨道の長さ2.9m、羨道の幅1.65mの両袖式横穴石室である。墓道8mを経て周濠に至る。玄門の内側から「V」字型の排水溝を、羨道の中央に真直に墓道にむかって掘り、その上を扁平な川原石で覆い、更に、その上に閉塞石を並べていた。羨門の外には、1号墳・2号墳同様に灰層があり、その厚さ3~4cmであった。

玄室内では、攪乱された粘土と混じった砂利を僅かに検出したにすぎない。墓道からは須恵器片を検出した。

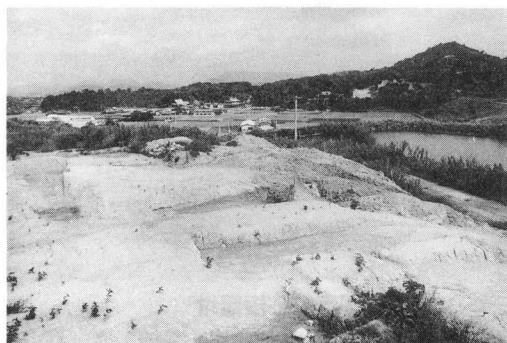


写真68 4号墳と14号墳(手前)



写真69 4号墳

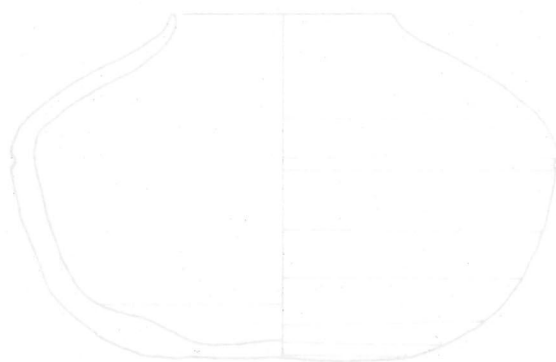
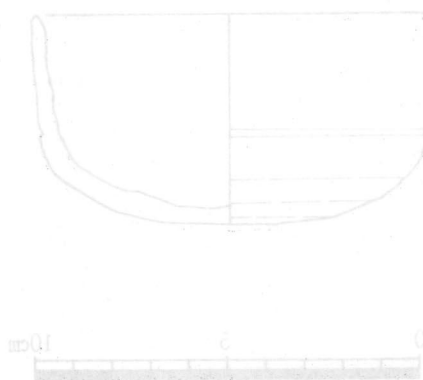
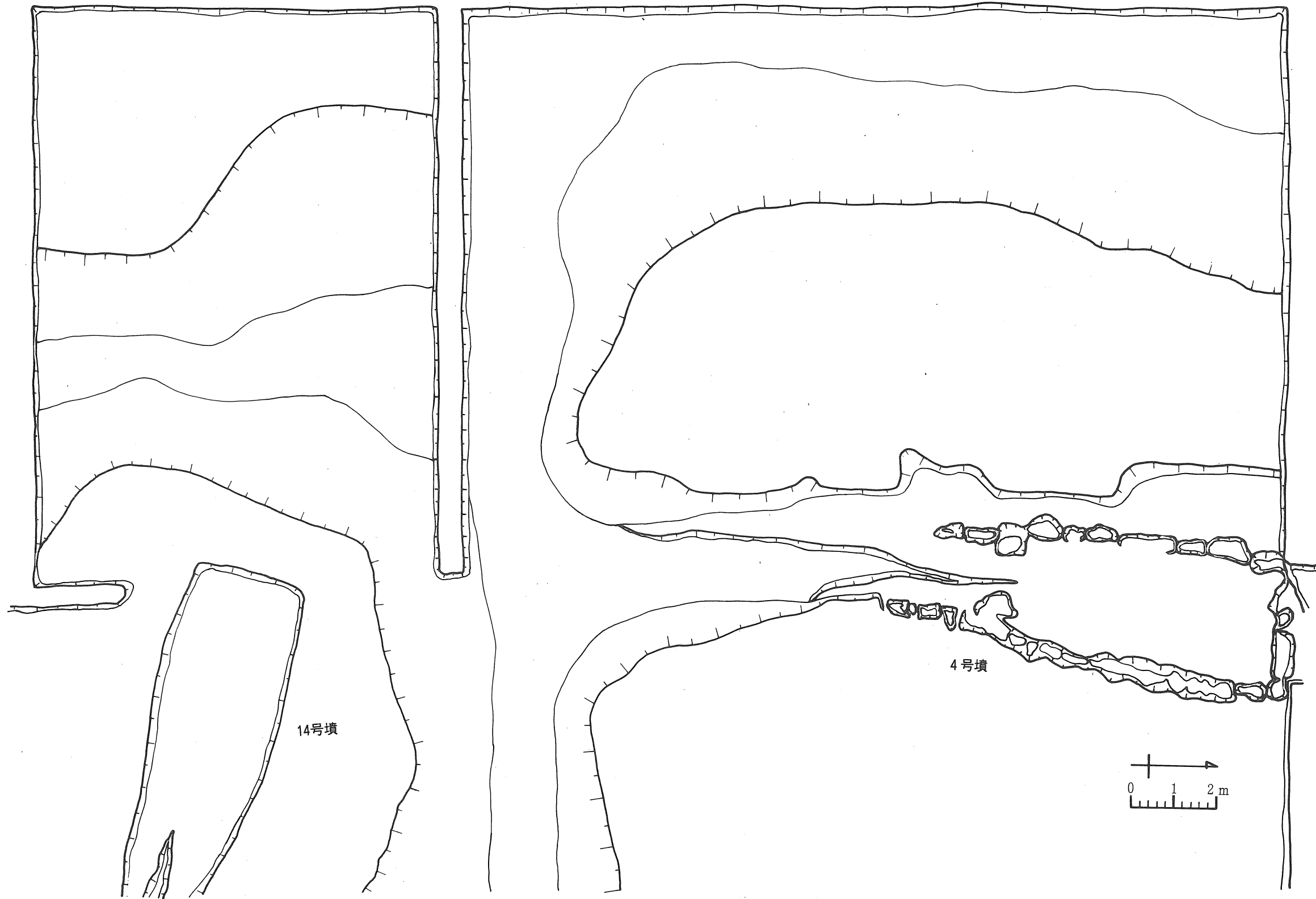


図36 横







第36图 4号墳・14号墳配置図



第37图 4号墳石室実測図

## 出土品について

### 短頸埴 (第38図)

口頸部欠失の為、器高は測定不能であるが、口頸基部の径5.5cm、器体の最大径10.9cmの小型の埴である。体部は肩に張りがあり、底は丸く、肩部近くまでへら削り調整がなされている。

### 甕 (第39図)

器高32cm、口縁部の径19.6cm、器体最大径31.5cm。外反する口縁部の端を折り曲げて、その部分を肥厚し、端部には丸味がある。口頸部には、まったく文様を施さず、体部外面には格子叩きの上、楕状のもので仕上げ調整をしている。内壁は同心円の叩き文がみられる。なお、体底部は丸く不安定であり、底には大きな歪み面がみられる。

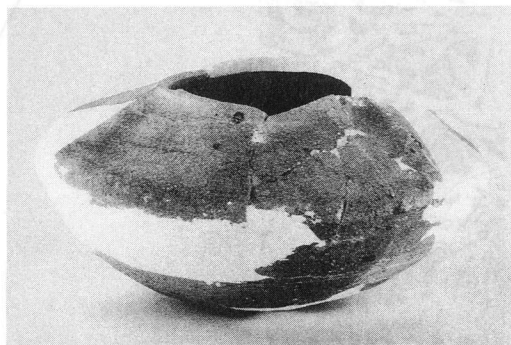
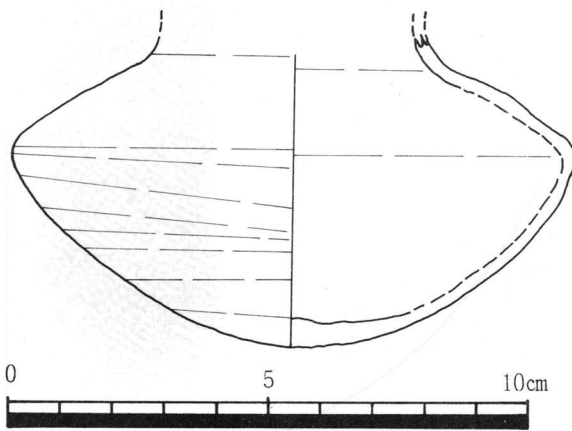


写真70 短頸埴



第38図 短頸埴

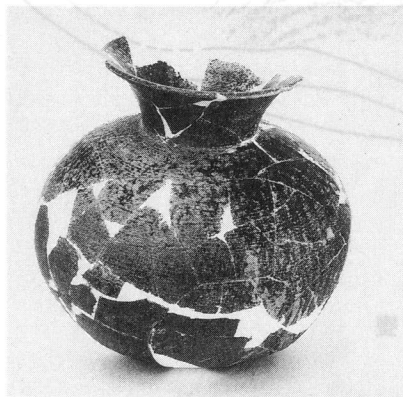
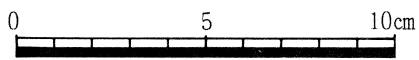
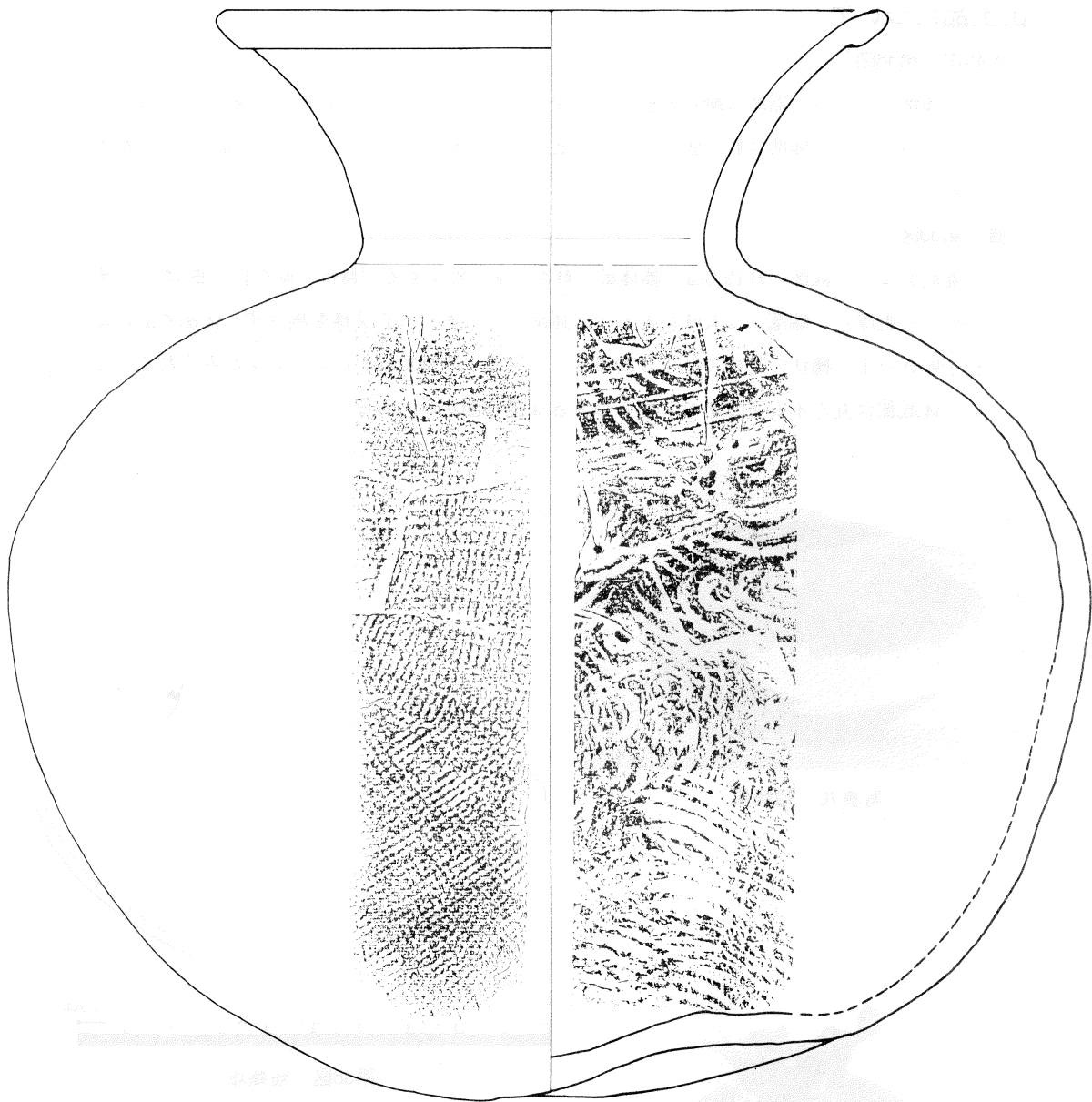


写真71 甕



第39図 甕

(5) 13号墳 (第40図)

1号墳の北約40m、標高64.75mの地点にあり、削平による破壊著しく、地表に粘土と混じった砂礫が表われていた。その下層に第1層の扁平な川原石の集団が検出されたものの、攪乱されており、石室の基底石も、その掘り形も、検出できなかったが、周濠の一部を検出することができた。周濠及び川原石の大きさ、形状、集合の状況から石室の大体の位置は判明したものの、規模、構造などについては確認できなかった。

(6) 14号墳 (第36・41・42図)

1号墳の北北東約61m、標高64.25mの地点にあり、4号墳と隣接し、ともに本調査区の北東部に位置している。東北東から東南東にかけては傾斜が急で、約3m下は道路に通じている。北側には約7mの処に4号墳の周濠がある。石室は開墾時の削平により破壊されているものの下半が残存し、遺存状態が概して良好である。

主体部はN-70°-Wに主軸をとり、ほぼ東南東に開講する横穴式古墳である。石室は、長さ6.00m、玄室は長さ4.00m、奥壁幅1.4m、玄門側幅1.17m、最大幅1.70mでやや胴張りしている。羨道は長さ2.00m、玄門側幅0.9m、羨門幅1.07mを測り、やや胴張り気味の両袖式の横穴式石室である。

奥壁と側壁の交わる隅は丸味をもった交わり方をしている。

石室の基底石には長大な川原石を据え、その上へ小口積みで南側・奥壁は3~4段に、北側は5段程度に、送り出し気味に構築された状態で残存していた。なお、玄門より1m程内側で側壁が崩れ、天井石とともに落下した状態も見られた。

玄門には、特に長大な川原石を据え、床面に仕切石を2個並べている。

玄室の床は扁平な川原石を敷き、その間隙に栗石を詰め合わせて構築していて、上層に砂利、或は、栗石の層が設けられていない特異なものである、また、扁平な川原石を敷き詰めた床面には多数の大型須恵器の破片が散乱していた。羨道よりの扁平な川原石の下から羨門外へ、中央に一条の「V」字型の排水溝が設けられていた。羨道の中程には、長手の石を2列並べ積んだ閉塞石を確認した。閉塞石と羨門の間に、高坏・坏・埴の破片が検出され、墓前には、幅0.55m、長さ1m、厚さ0.15m~0.25mの灰白色の灰層を検出し、墓前祭を物語っている。

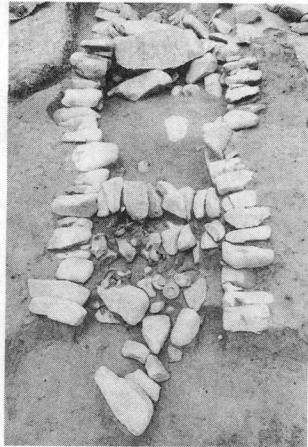


写真72-1 14号墳

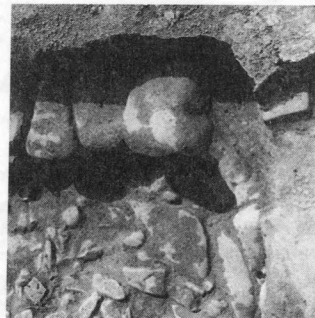


写真73 14号墳 奥壁隅



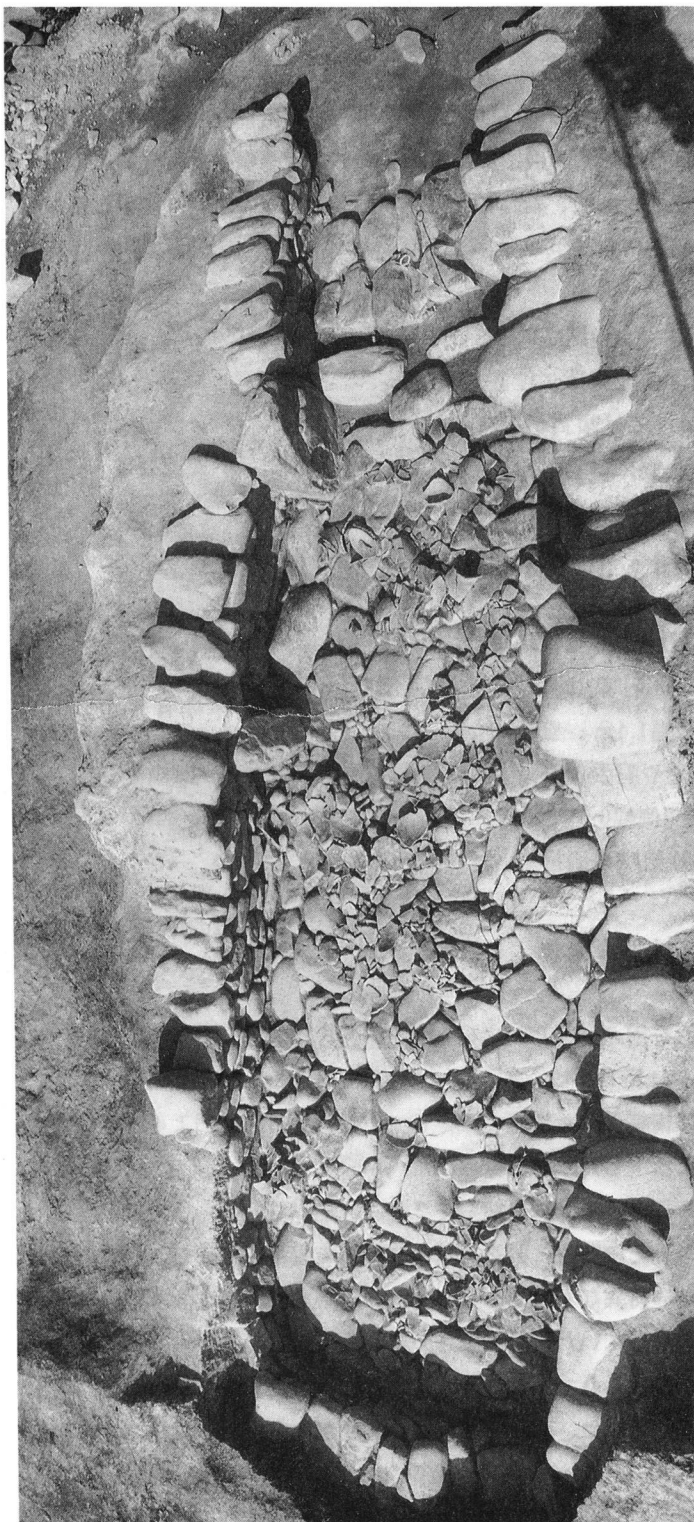
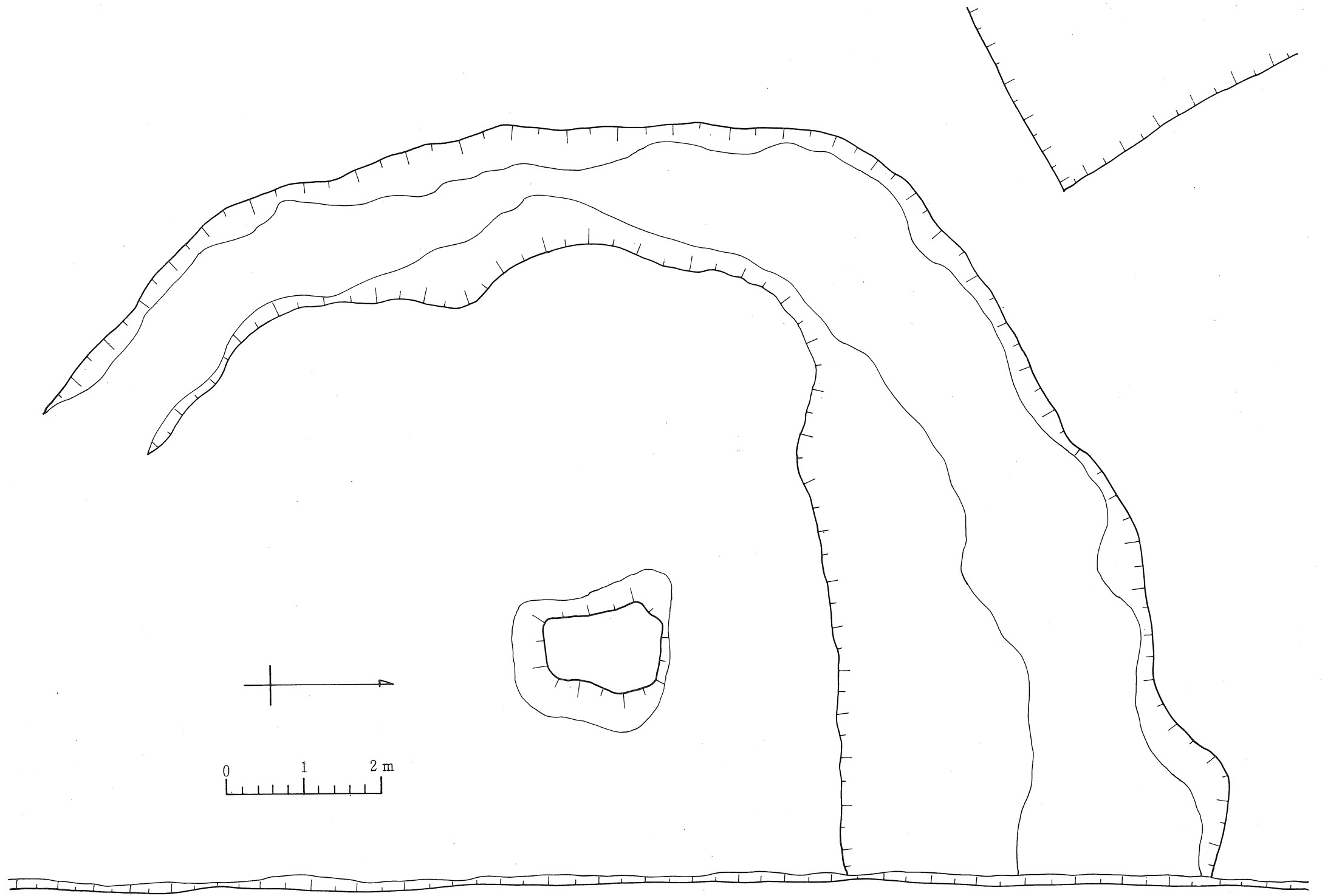
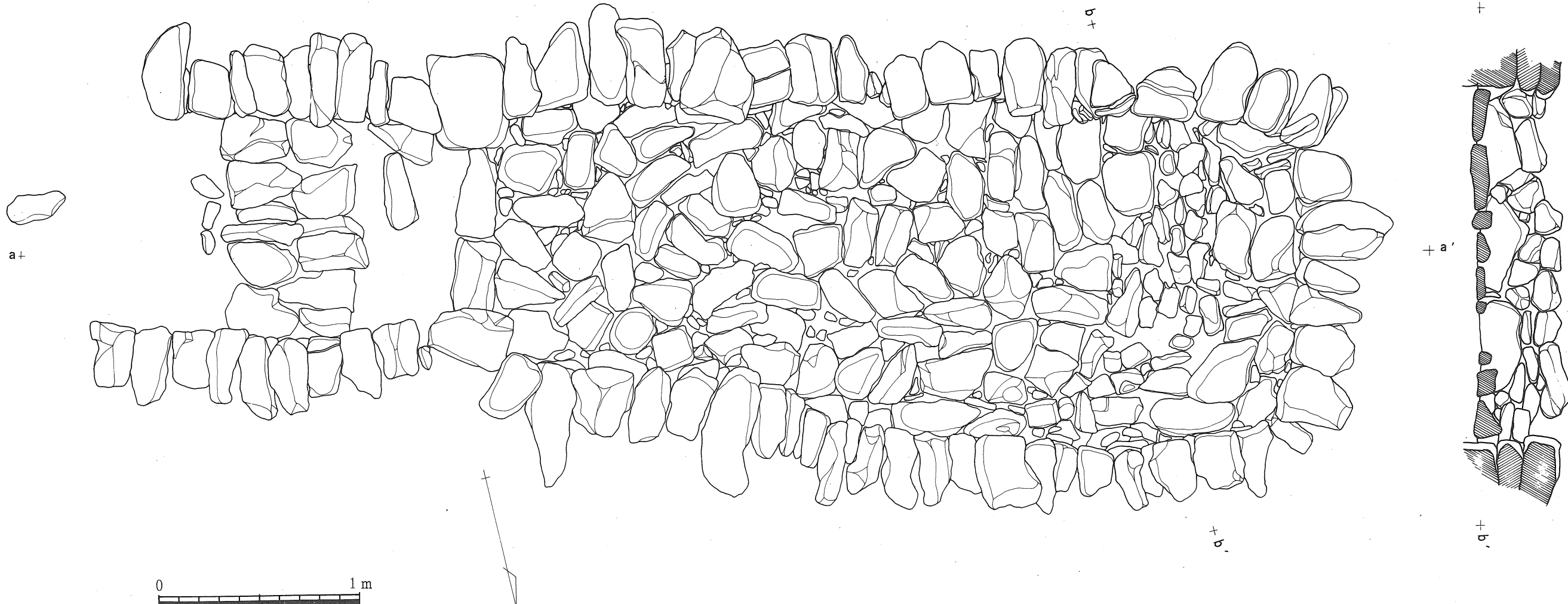
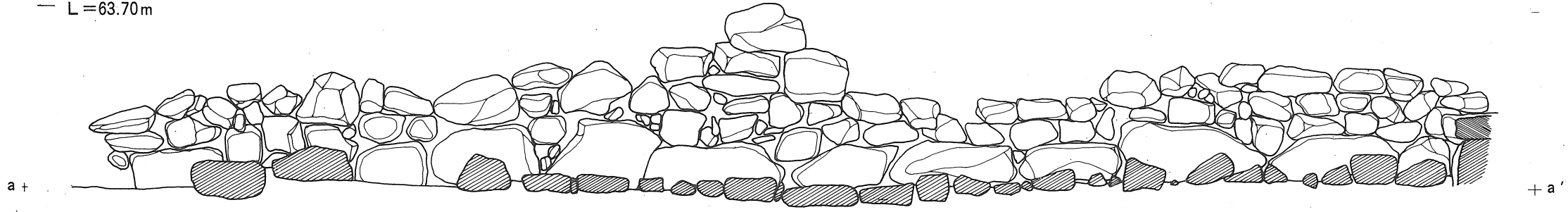


写真72-2 14号填石室



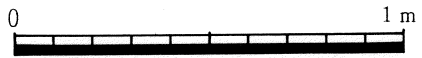
第40图 13号墳実測図

L=63.70m



0 1 m

第41图 14号墳石室実測図



第42图 14号填羨道部土器出土状况实测图

## 出土品について

### 耳環（第43図）

- (1) 外径2.4cm、太さ0.5cm。C型の銅環に薄銀板をかむせた銀環で、玄室の鏡石より約2m程離れた北壁側の礫床で検出した。
- (2) 外径（長径）2.6cm、（短径）2.3cm、太さ0.6cm、C型の銅環に薄銀板をかむせた銀環で、玄室奥の南側壁で検出した。(1)よりも腐食が進んでいるものの銀の光沢が確認できる。

### 鉸具（第43図）

- (1)、(2)、(3)、ともに直径0.5～0.7cmの鉄棒で作製したもので、馬具の一部ではないか。

### 飾り金具（第43図）

厚さ約0.3cmの鉄板で作製したもので、片面に直径0.7cm程の鉄の小球を付け、短径2.1cm、（長径は部分欠失のため測定不能）の小判型の飾り金具か。

### 鉄器（第43図）

厚さ0.1cm程の鉄板製で、底面が丸味のある三角状で、上方は丸く円錐状をし、中は中空である。

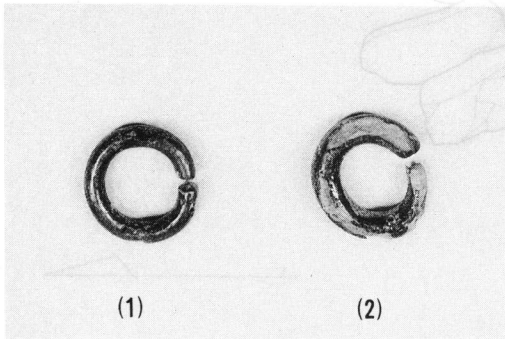


写真74 耳環

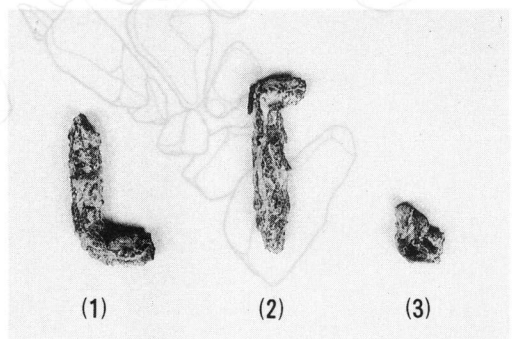


写真75 鉸具

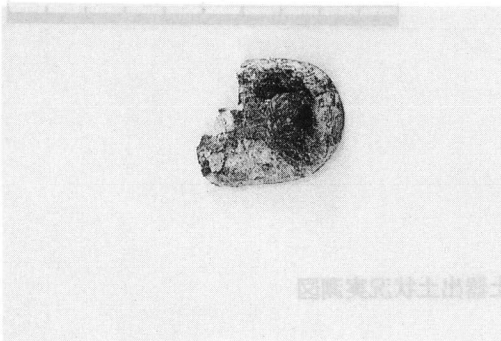


写真76 飾り金具

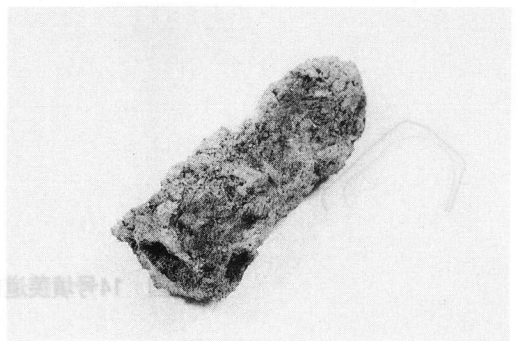


写真77 鉄器



鉄鏝 (第43図)

鉄鏝の先端部で、鏝部の厚さ0.1cmである。他に長さ約5cmの茎を一個検出した。

鉄片 (第43図)

やや湾曲した鉄板片4片含む10数点を採集した。

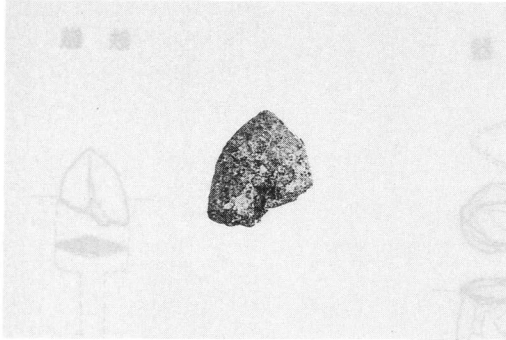


写真78 鉄 鏝

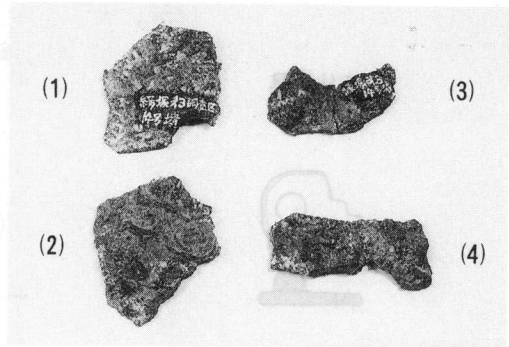
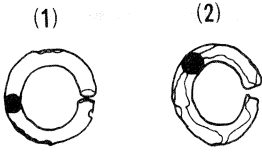


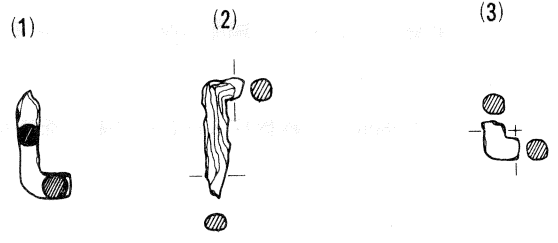
写真79 鉄 片



耳環



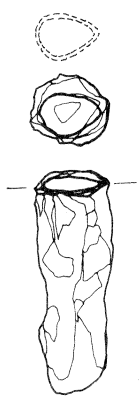
鉸具



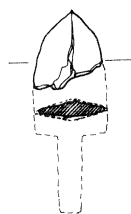
飾り金具



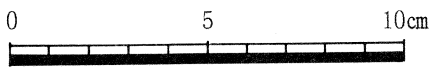
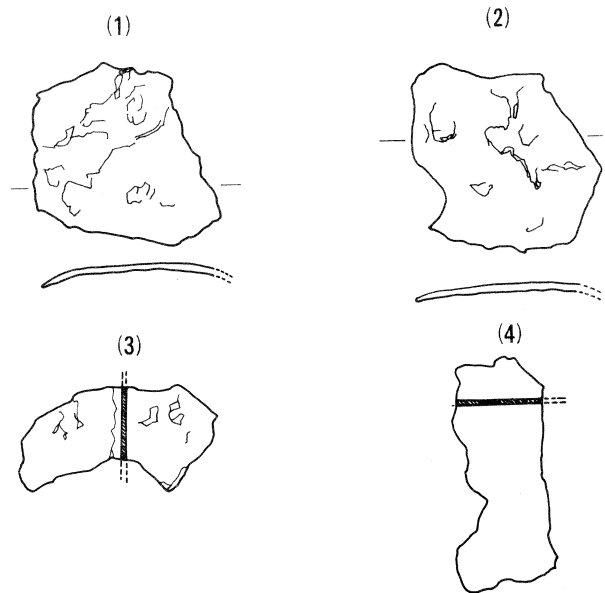
鉄器



鉄鍬



鉄片



第43図

坏蓋(1) (第44図)

器高2.0cm、口縁部の径10.7cm、天井部外面の中央には径2.9cm、高さ0.3cmで、中央に凹面をもつ擬宝珠様のつまみが付され、たちあがりは、高さ0.6cmと比較的高く、内傾し、下方にのびている。口縁端部より2.4cm程内側の上面に一条の沈線を施している。口縁端部、たちあがりの端部ともに丸く仕上げられている。

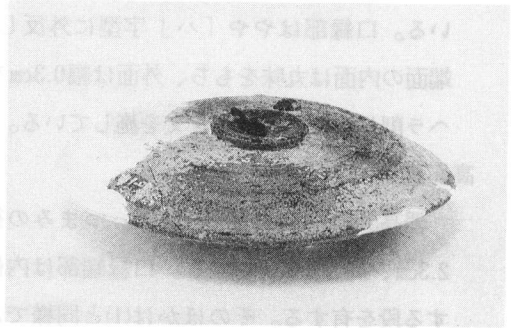


写真80 坏蓋 (1)

坏蓋(2) (第44図)

器高3.9cm、口縁部の径15.8cm、天井部外面の中央には径2.8cm、高さ1.2cmで中央に浅い凹面をもつ擬宝珠様のつまみを天井部成型後に貼付し、その後、回転ナデ調整を施している。たちあがりは内傾し、高さ1.5cmあり、口縁端部よりも下方に張り出しており、端部は丸く仕上げ、手法的には、ハリツケによるものと思慮される。



写真81 坏蓋 (2)

坏蓋(3) (第44図)

器高4.6cm、口縁部の径18cm、天井部外面の中央には径2.4cm、高さ1.4cmで、中央に凹面をもつ擬宝珠様のつまみが付されている。また、口縁端部は丸く仕上げている。

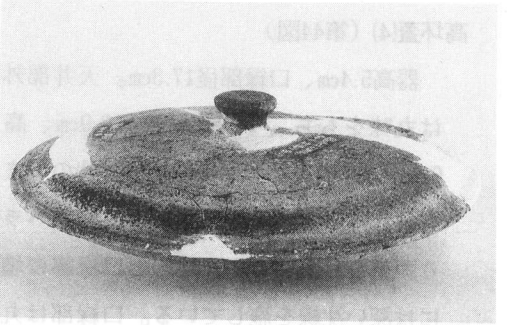


写真82 坏蓋 (3)

(1)・(2)・(3)とも天井外面は扁平状で、緩やかな傾斜をもち、内面外面ともに回転ナデ調整をしている。

高坏蓋(1) (第44図)

器高5.2cm、口縁部径15.6cm。天井部外面は丸味を有し、中央部には直径3.3cm、高さ0.5cmのつまみを付している。天井部と口縁部の境界には鈍い稜と、深い沈線を施して



写真83 高坏蓋 (1)

いる。口縁部はやや「ハ」字型に外反し、端面の内面は丸味をもち、外面は幅0.3cmをヘラ削りの後、ヘラかき文を施している。

高坏蓋(2) (第44図)

器高5.4cm、口縁部径15.5cm。つまみの径2.3cm、高さ0.9cmである。口縁端部は内傾する段を有する。そのほかは(1)と同様である。



写真84 高坏蓋 (2)

高坏蓋(3) (第44図)

器高5.8cm、口縁部径15.4cmで天井外面は、(1)・(2)に比して丸味が強く中央部に直径2.4cm、高さ0.7cmのつまみを付し、全面を回転ヘラ削り調整を施している。口縁部は「ハ」字型に外反し、端面内面は内傾する段を有する。天井部、口縁部とも内面はミズヒキによる手法が施されている。

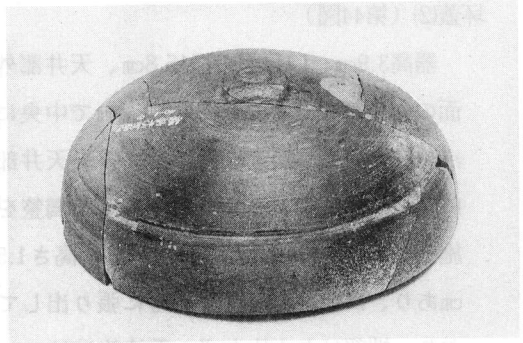


写真85 高坏蓋 (3)

高坏蓋(4) (第44図)

器高5.4cm、口縁部径17.3cm。天井部外面は丸味をもち、中央部に直径2.9cm、高さ0.7cmで、中央部がくぼんだ円盤状のつまみを付している。天井部外面は、回転ヘラ削り調整をしている。天井部と口縁部の境界には深い沈線を施している。口縁部は丸味をもって「ハ」字型に外反するも端部は丸味をもち、外面に外傾する段を感じる。

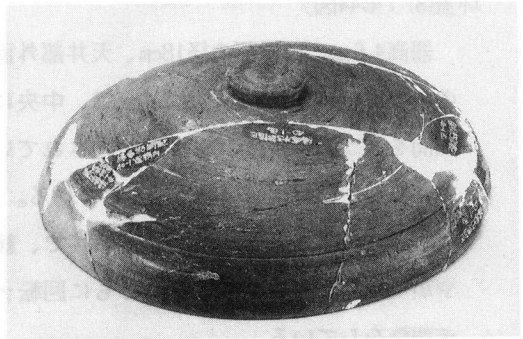
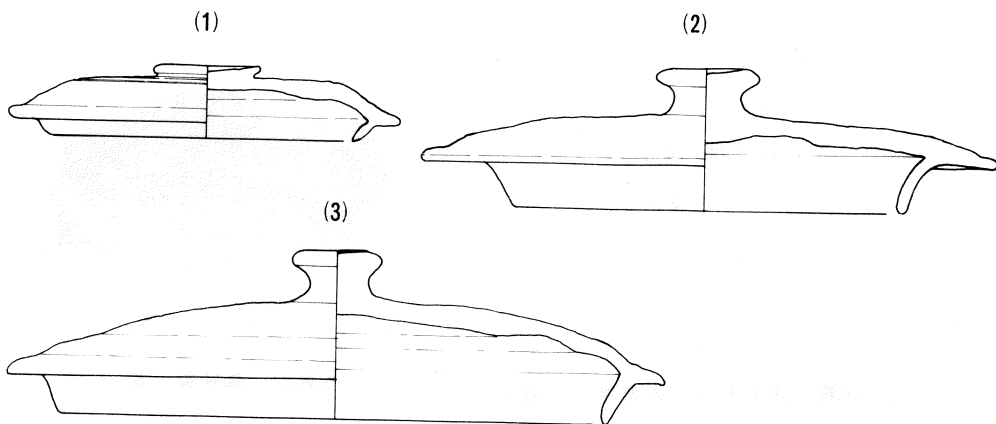
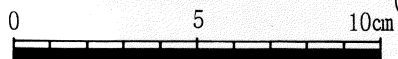
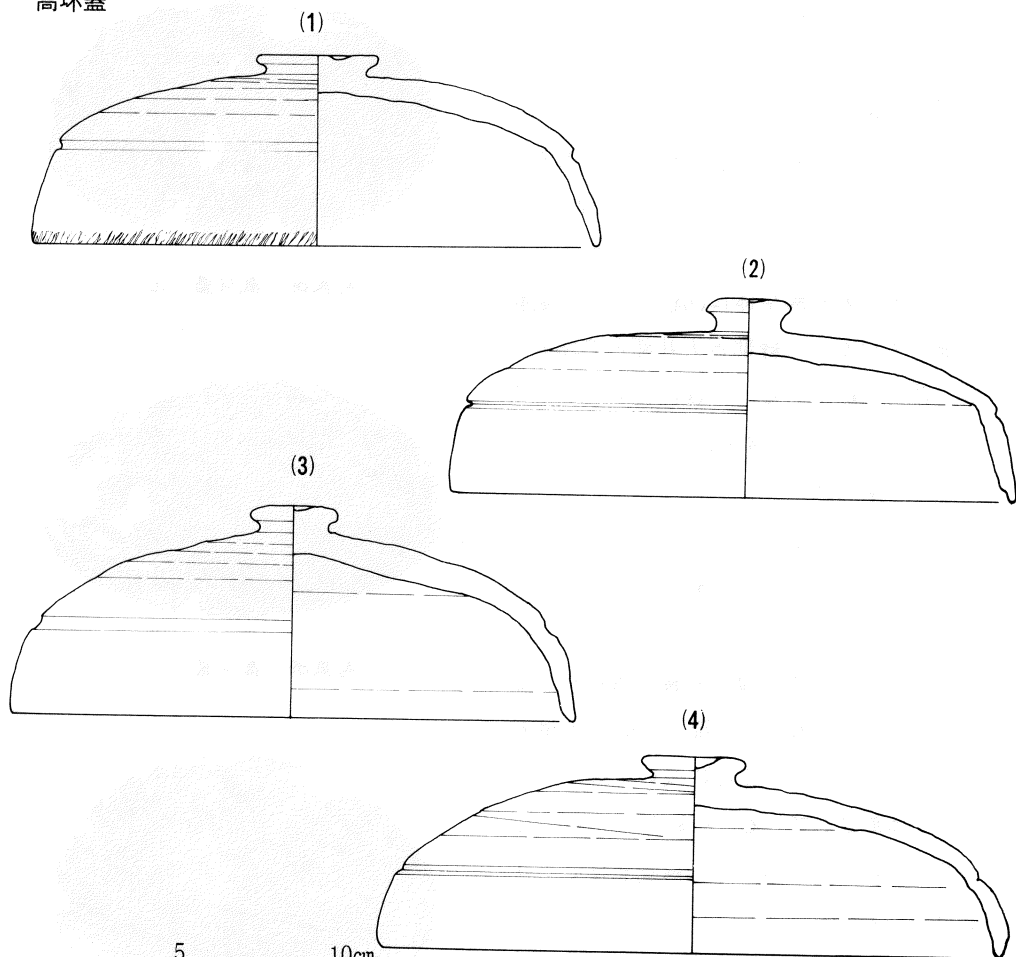


写真86 高坏蓋 (4)

坏 盖



高坏盖



第44图

高坏蓋(5) (第45図)

器高5.4cm、口縁部径16.0cm。天井部外面は丸味をもち、中央部に直径3.1cm、高さ0.8cmの凹んだ円盤状のつまみを付す。天井部は回転ヘラ削り調整が施され、中程に沈線一条がある。天井部と口縁部の境界には幅0.2cm程の浅い沈線を施している。口縁部は中程に沈線一条がある。天井部と口縁部の境界には幅0.2cmの浅い沈線を施している。口縁部は中程で絞り気味に外反し、端部は丸く仕上げている。

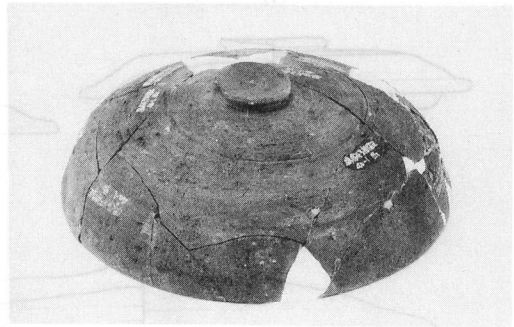


写真87 高坏蓋 (5)

高坏蓋(6) (第45図)

器高5.7cm、口縁不径16.8cm。天井部外面は丸味をもち、中央部に直径2.6cm、高さ1.1cmの中央がくぼんだ擬宝珠様のつまみを付している。天井部全体に回転ヘラ削り調整を施している。口縁部と天井部との境界には、浅い沈線がある。口縁部は直立気味で端部の内面には内傾する段を有す。

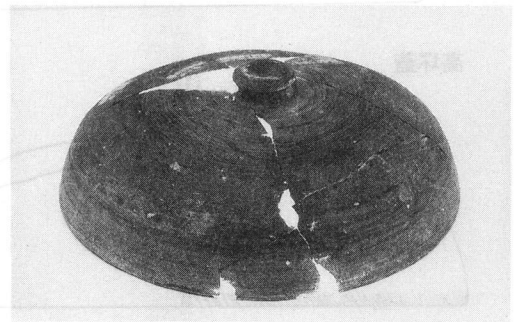


写真88 高坏蓋 (6)

高坏蓋(7) (第45図)

器高5.2cm、口縁部径15.5cm。天井部外面は丸味があり、全面に回転ヘラ削り調整が施されている。また、中央部には直径2.5cm、高さ0.7cmの中央がくぼんだ擬宝珠様のつまみを付している。天井部と口縁部の境界とその上部1cmのところに浅い沈線がそれぞれ1本施されている。口縁部は中程で絞り気味に僅かに外反し、口縁端部は丸く仕上げている。



写真89 高坏蓋 (7)

高坏蓋(8) (第45図)

器高6cm、口縁部径17cm。天井部外面に



写真90 高坏蓋 (8)